大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年一月一日發行 第一卷第四號

近代思想

一月號

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

實業之世界

大正二年一月元旦發行
毎月二回一日十五日發行
定價一部十一錢郵稅一錢
本號に限り 定價二十二錢 郵稅 二錢

新年號讀物

發行所 東京芝露月町 實業之世界社 振替貯金口座 三四三三

東京魁新聞

▲東京魁新聞は月三回發行、毎號十二頁の大新聞で、然も一部金三錢、一ヶ月金十錢、一ヶ年金一圓といふ破レコード的低廉です

▲東京魁新聞は旬日間の重要な出來事に、剴切精到なる批判評論を加へて報道する外、忌憚なき人物月旦、趣味多き演藝記事、破天荒の探偵小說、諸外國の最新事故、及び本紙獨特の大寫眞版を滿載します。殊に政界の巨頭連が魂膽、詐欺會社やボロ銀行の秘密は、恰かもX光線で照した如く明かに映し出される處、他新聞に見られぬ特色です。

▲東京魁新聞は毎號若宮卯之助、岩野泡鳴兩氏の痛烈なる論評を掲げ、猶堺利彦氏も時々寄稿せられます

發行所
東京市麹町區有樂町一丁目三番地
東京魁新聞社
電話本局一六八七番
振替二三一九六番

第三回 新學期開講

普通漢學講義

●切實なる時代の要求に依りて生れたる最も實際的なる漢學講義錄！（此際入會者には特典あり）

講義 毎月二回發行　**講師** 博士、學士、其他數名

會費 一ヶ月 四十錢 一ヶ年（全部四圓四十錢）　**會期** 一ヶ年

漢學は東洋思想の源泉にして東亞文明の根本たり其教訓の深遠なる其興味の無限なる一朝にして之を悟るべからず然るのみならず漢文學は日本文學の一支源にして其感化の及ぶ所至大至深なり苟くも漢學の智識を缺きては遂に文を屬する能はず。思想に志あるものと文章に志あるものと凡て必ず之を學はざるべからず（附かも世に漢文學を平易に講述せるもの甚少し、本會夙に『漢學講義』を發刊して其平易なる講義と懇切なる指導により、大に斯界の歡迎を博し既に學期を重ねて基礎益々固く信用益々深きを加ふるに至れり、今や第三新學期を開講し大に特典を設けて會員を募集す。江湖斯學に志あるの士、速に來て入會せられよ。講義錄「見本付會則」申込次第無代進呈す

●漢學獨習に缺く可らざる講義錄として好評嘖々たり

東京小石川大塚上町十三　振替（東）一二九四番

漢學普及會



第一巻　第四號

生の試み

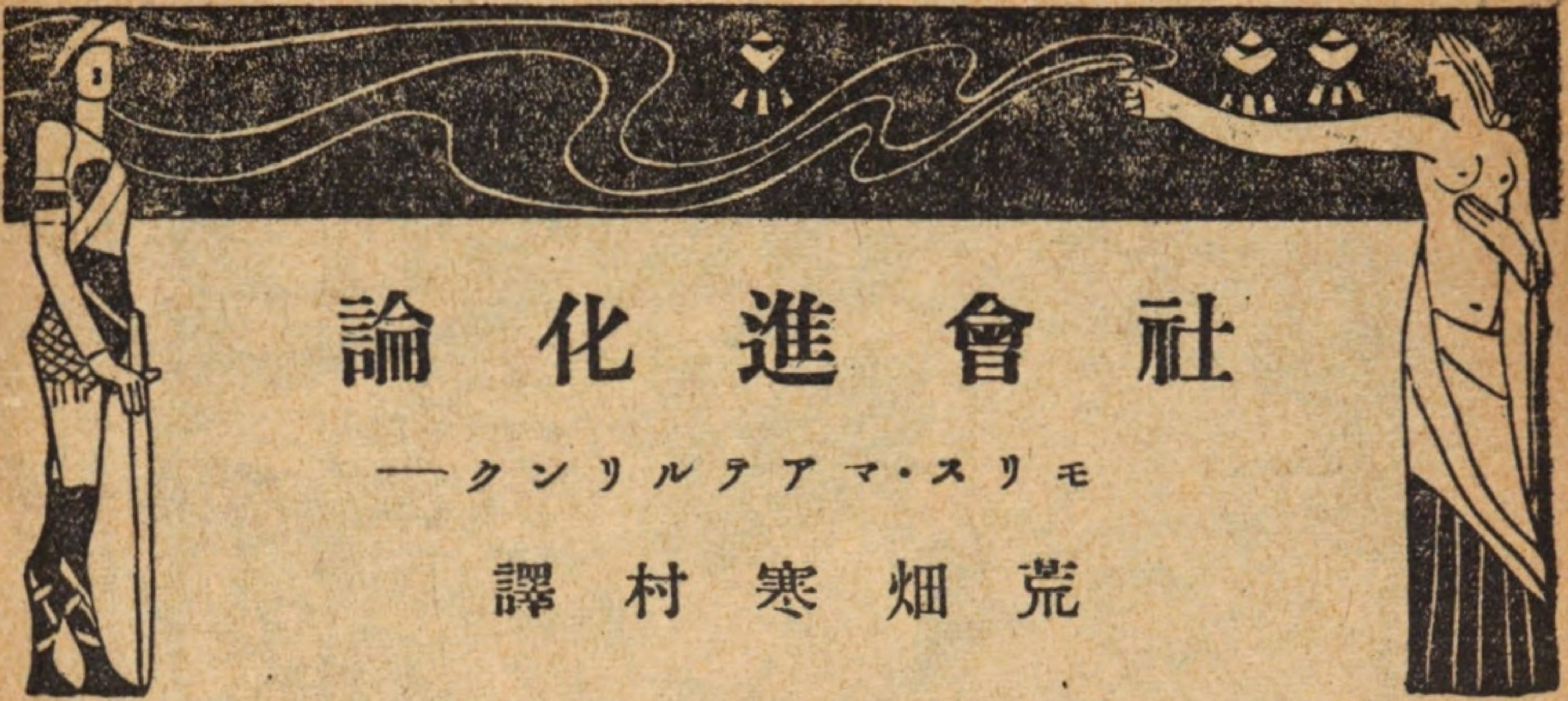
私は、神學がさう教へるやうに、果して生が試みであるか否かは知らない。

けれども要するに生は、吾々が自分から好んで從ふ試みぢやない。試みの條件は十分にはつきりと定められてゐない。又此の生はあらゆる人々に決して平等なのでもない。生れて直ぐに死ぬ子供や、白痴や或は狂人の身に取つて、生の試みとは抑々何んの事だらう。

此等の異論に對しては既に答へられてゐる。いつも人はこれに答へてゐる。けれども其の答は、幾度も幾度も答へねばならぬやうに、あまり善く出來てゐてはいけない。

生は試驗室のやうなものぢやない。寧ろ大きな陶器工場にも似てゐる。あらゆる種類の器が、先きの知れぬ用のために此處に造られる。そして其の多くは、型の中で碎かれて、一度も使はれる事もなしに、汚ない瓶と一緒に投ぅられて了ふ。或物は又、ひどい或はいやな用にしか使はれない。此等の瓶、それが即ち吾々なのである。

――アナトル・フランス――



社會進化論

——モリス・マアテルリンク

荒畑寒村譯

一

所有者が眞の義務は只だ一、即ち一切を拋擲して、無一物の狀態となる事である。明らかに思索する萬人の良心には、それ以上の最高義務なしといふ事は了解されて居るが、只だ勇氣が缺けて居るばかりに、その遂行は殆んど不可能となつて居るのである。

勇敢なる義務の歷史の中で、その最も熱烈な時代に於てさへも、基督教の初期、及び貧困の特別な禮拜をなした多くの宗教的儀式の中でさへも、恐らくそれのみは、全く仕遂げられなかつた唯一の義務であらう故にそれは、吾々が第二義の義務を考へる時、その最も主要なるものが、意識して避けられてあるのを想ひ出させる。此の眞理をして吾々を支配せしめよ。吾々をして、吾々がその蔭に於て語つて居る事を忘れしむるな。而して吾々の最も勇敢なる、吾々が極力の歩みも、吾々が最初からそう在らればならなかつた地點に、決して導かぬといふ事を忘れしむるな。

大なる問題は暫らく擱く、正直な心が常に考へて居る他の二三の問題がある。即ち現在の社會狀態に在つて、吾等何を爲すべき乎。吾々は組織的に、それを解體して行く者に左擔すべき乎。將た、その經濟を維持せんとして努力しつゝある團體に加入すべき乎。或はその何れをも選定せず、時に應じて宜さゝうに見へる方に贊成するのが賢い方法だらう乎。

二

吾々をして、嚴肅に辯護され得るものゝ外、一切の傳習的異論を評論せしむるな。吾々は最初に彼等の最も舊いもの、即ち不平等は自然の法則と一致せるが故に、不可抗的のものだといふ主張に出つ會す。それは事實である。然し恐らくは、人間の種屬は自然の法則の或る點以上に、自身を現はすやうに作られては居ないだらう乎。もし人類が、是等の法則の數を超へんとする意嚮を捨てたならば、その存在は危ふくなる筈である。その動物性の法則よりは、他の法則に從ふ方が、その特殊の性質に一致するのである。且つ此の異論は、守り難い、そして弱者、病者、老人等の虐殺に導くべき主義の間に、既にとうに入れられてある。

次に、正義の勝利を早めるために、吾々

の間の優勝者はその武器、即ち最も有力なる富とか閑暇とかいふものを、時機猶早きに自ら抛擲してはならぬといふ者がある。此處では、大なる犠牲の必要は明らかに認められて居るのだが、只だその好機といふ問題が残つて居る。もし此の富と閑暇とが全く正義の進歩を早めるためにのみ用ひられるならば、吾々は勿論これに同意するに躊躇しない。

他の保守的なる、やゝ傾聽に値すべき議論は、人類が第一の義務は、急激なる破壊を避くる事に在るが故に、社會進化は必ず早過ぎてはイカぬ。それは靜かに熟して行かなければイカぬ。群衆が激發する事なく徐ろに啓發されるのが肝要だといふのである。是も亦事實には違ひない。しかし又、急激な、そして破壊的の變化が、果して遲々たる進化よりも有害か如何かを研究するのは、甚だ重要な問題である。全速力で行動するのは利益ではないだらう乎、正義を俟つて居る者の患みは、現代の特權階級が、數週或は數月の間受くべき患みよりは、一層痛慘なものではないだらう乎。

三

吾々は人類全體が、人類固有の勞働たる智識的勞働にたづさはれる時、如何なる事が起るかを先見し得る乎。今日、一万人中の一頭腦と雖も、全然その活働に適せる境遇に在るものは無いのである。此の瞬間に驚くべき夥多なる精神上の力は浪費されつつある。現在に於ては、僅かの特權ある者にのみ取つて置かれてある事業に、自身を適應せしむべき機會が萬人に與へられた時人類が大なる神秘的の目的に達する望みは數千倍するに違ひないといふ事は、到底拒むべからざる眞理である。

余惟ふに、こゝに吾々は贊否の最善の理由を有して居る。そして此の事を急がない者に依つて呼び求めらるゝ理由の眞ん中には、不正不義の大なる一本石（モノリス）が立つて居る。それは良心を抑壓し、智識を阻害するものだ。此の一本石を轉覆してはならぬといふ問題は無い、それを轉覆せんとする者の要求せらるゝ凡ては、その周圍が清められた時、その沒落が惹起す災害を、極めて僅かに止めて置く爲めに、數年間忍耐せよといふのである。

吾々は此年月を許すべきである乎、そして或は急ぎ、或は俟つといふ、是等の議論の孰れが、最も正直なる選定の目的物であるだらう乎。

四

現代は吾々を滿足させぬといふ事實は、將來の到着に備へるために、現代を支持する一切の破壊を、吾々の義務とするに充分ではない乎。よし吾々は甚だ明白に、急速なる進化の危險と不利益とを認知すべしとするも、人類の天才に依て吾々に與へられたる機能を忠實に遂行するには、毫も忍耐愼重を顧慮せざるべきを要する。社會的氣圍氣に於て、吾々は將に酸素を代表して居る。然るに若し吾々が、不活潑なる窒素の如く行動するならば、吾々は自然から托された使命に背く事になる。そして是は、罪惡中最も重大なる最も宥し難き背叛である急速の悲しむ可き結果ばかりを考へるのは吾々の仕事ではない。是は吾々の役割には書いてない。そしてそれを算へるのは、自然が口授した確實な教科書の中に無い、不調和な語をその部分に加へる事になるであらう。人道は地平線に立てる者を集める事を吾々に命じた。それは論議す可らざる教訓を吾々に與へた。それは正しいと思つた

通りにその力を分配した。將來に導びく道路の凡ての十字街に於て、それは吾々各自に反して、過去を守るべく數萬の人間を配置した。過去時代の最も美しき塔の防禦が完備して居るとも、吾々をして恐怖を抱かしむるな。吾々は餘り自然に時勢に隨ひ、脫れ難き壓滅の上に涕泣するやうに傾いて居るが、是は吾々の最も大なる弱點である。然し乍ら他をして盲目に、彼等を押し進める內部の衝動に從はしめよ。彼等の理性は彼等が加はれる極端なる計算の何ものをも是認せずとするも、彼等をしてその理性を超へて希望し、行動せしめよ。何となれば何事にまれ吾々が達せんと望める目的よりは、更に高く目指す事が必要だから。

五

故に吾々をして、決してやり過ぎるのを恐れしむるな。亦よし正しくとも、追懷をして吾々の熱望を破り、或は宥和せしむるな。吾々が將來の過剩は、生活の平衡に本然なものである。吾々の周圍には、吾々が燃す火を消すのを以て、その唯一の義務とし、その最も正しき使命として居る多くの人々がある。吾々をして、常に吾々の思想吾々の希望、及び吾々の正義の最極端に赴むかしめよ。吾々をして、是等の努力が只だ吾々の中の、優勝者に據れるものなる事を想はしむるな。是は事實ぢやない、そして彼等が了解せざる夜明の到着を先見する吾々の中の最も卑しい者と雖も、猶彼等自身の最絕頂にあるものである。是等の中間の頂上に於ける彼等の存在は、最初の高さと最後のものとの間の恐るべき間隔を、生ける物質を以て滿たすであらう。そして先鋒と本隊との間の、必要なる交通を支持するであらう。

吾々をして時に、永遠の上に人類の運命を運んで行く、見へざる大船を想像せしめよ。吾等が限られたる大洋の船舶の如く、彼女はまた帆と脚荷とを有して居る。彼女が碇泊所を離れたゝめに、堅搖れがしたり橫搖れがするだらうといふ畏怖は、毫もその船艙の底に、淸らかな、白い帆を積み込んで、脚荷の重さを增す理由にはならない彼等は暗闇に於ける礎石と一緖に、黴びるべく織られてはなかつた。脚荷は何處にも存在する、港の凡ての礫、濱に在る凡ての砂も、それに代る事が出來る。然し帆は稀れな、尊いものである。彼等の場所は暗い井の底ではない、明るい高いマストの上である。そこに彼等は疾風を呼び集へるのである。

六

吾々をして、最善の眞理は常に中庸の中に在る、平均の間に在ると云はしむるな、是は若し人類の大多數が、必要よりもつと低い平面に就て考へず、望まなかつたなら恐らくはそうであるだらう。是れ蓋し他の者をして、正當に思はれるよりもつと高い平面を考へ、且つ望ましめる所以である。現今の平均とか、よき中庸とかは、將來に於ける最も人間らしくない事であらう。西班牙の宗教裁判當時に在つては、常識家と中庸家との意見は、異教徒を餘り澤山焚殺してはイカぬといふのであつたが、極端にして不合理なる者の意見は、一人でも焚殺してはならぬといふのだつた。是は今日に在つても、結婚、戀愛、宗教、犯罪、正義等に關してやはり同じである。人類は未だ正しき理想が、極端な理想であり、最も高き理想であり、思想の頂上に於ける理想である事を理解する程、永く生きて來なかつたのだらう乎。現在に於て、社會問題に關

する最も合理的な意見は、徐々に止むを得ざる不平等を減じ、そしてもつと公平に幸福を分配するやうに盡力しろと云ふのである。然るに極端な意見は、直ちに全き分離貧困と強制的勞働の絶滅を要求する。吾々は如何にして、此の要求を實現すべき乎を知らない。然し乍ら甚だ單純な事情が、一日彼等をして、長子の權利或は貴族の特權の絶滅の如く自然なものとして現はす事は既に全く確實になつて居る。國民或は個性の事のみならず、種屬の期間の問題に於ても吾々は歷史の經驗ばかりを賴つてはならぬ。肯定し否定する處のものは、畢竟無意義なる圏を回轉するに過ぎない。此の場合に於ける眞理は、常に過去のみをふり返る吾々の理性よりは、將來を眺める吾々の想像に於て、更に多く存在して居る。

七

然らば吾々の理性をして、經驗を超へて飛翔すべく努力せしめよ。是は青年に對つては容易である、然し、中年及び老年者が青年の光輝ある無智の上に、彼等自身を上げる事を知るのはいゝ事である。吾々は吾々が出會ふた多くの邪惡な人々の爲めに、種屬に對する吾々の信用迄をも失はんとする危險に對して、豫かじめ考へなくてはならぬ。吾々をして凡てに關せず、恰かも吾々が理想的人類に對するが如く、行動すべく、愛すべく、また希望すべく續けしめよ此の理想は吾々が見たものよりは、更に廣き現實のみである。個性の失敗は或る高處から見た時、海の深き清澄を亂す海面の波よりは、より以上に一般の純潔と無辜とを傷ふものではない。

吾々をして、吾々を進ましむる經驗のみに聞かしめよ。それは吾々を投げ戻し、或は引き止むる處のものよりは、常に一層高いものである。吾々をして、吾々を將來に向はしめざる過去の忠告を一切抛擲せしめよ。是れ恐らくは有史以來、佛蘭西革命當時の或る人々に依て、初めて正當に了解された處のものであつた。そしてそれは又、此の革命が最も大なる、且つ最も永續すべき事業を成就した所以である。此の經驗は、日常生活の出來事に於て起る事とは違つて、何よりも破壊が大切だといふ事を吾々に教へる。凡ての社會的進歩に於て、大なる、且つ唯一の難事は、部分的の破壊である。吾吾は廢滅の代りに何を置かう乎といふ事に就て、何も心配する必要はない。事物と生活との力は、その再築を引受けるのだ。故に吾々は、破壊力を無暗にさへも使ふ事に躊躇してはならぬ。吾々の打擊の暴力の十分の九は、恰かも大石の上に打ち下した重いハンマアの打擊も、その石を持つて居る者には何の感じを與へぬやうに、不活潑なる集塊の間に失はれて了ふ。

吾々をして亦、吾々が余りに早く進む事を恐れしむるな。時に吾々が、無鐵砲な、そして危險な速度で突進して居るやうに見へても、是は許し難き遲蹟に平衡し、そして數世紀の靜止の間に失つた時をとり返すものである。

近代佛文學一面觀

大杉榮

一

自由平等博愛と云ふやうな美名の下に行はれた佛蘭西大革命も、要するに大詐僞師のいかさま仕事に過ぎなかつた。成程貴族は倒れた。けれども成上者のブールジョワジーが、すぐ樣其の後釜に坐りこんだ。帝國は共和國と變つた。けれども其の實質に至つては遂に何んの變りもない。そして彼の成上者の横暴は、前にも増して益々風俗の墮落を來さしめた。殊に一八七一年、即ち普佛戰爭の後の、ブールジョワジーの勢力が確立せられた政變からは、愈々此の感を深からしめた。

斯くして政治の幻滅が起つた。そして一とたび何處かに起つた幻滅は、更にあらゆる方面に擴がらざるを得ない。權力者特有の樂觀主義に對する若き智識者の煩悶と悲觀と懷疑とが生じた。從來の一切の觀念は一々に解剖批判せられた。ショウペンハワーの哲學說、クロード・ベルナールの心理學說、テーヌの新批評說、ルナンの科學說などが相次いで盛んに讀まれたのも此の頃の事であつた。そして若き智識者は此等の著書の間に、ひたすらに個人主義的傾向の横溢してゐるのに憧れたものである。

普佛戰爭の大敗の後は、佛蘭西が世界の最も美はしき國であると云ふ幻影も消滅した。そして他の歐羅巴諸國に於ける智識狀態の眞相を學ばうとする傾向が現はれた。外國文學、中にも北歐文學がしきりに輸入せられた。殊にイブセン劇の及ぼした影響は、佛國近代文學の上に一新時期を劃せしめた。

新代の青年は、イブセン劇の悲壯美に醉はんよりも、寧ろ其の作中に現はれた自意識とか、婦人の社會的解放とか、自由思想とか、又は風俗批評とかの觀念に思ひを潛めた。從つて『人形の家』や、『幽靈』や、『ロスムメルスホルム』や、又は『人民の敵』などが、殊に此の意味で盛んに歡迎せられた。そしてブールジョワジーの極端なる中央集權的思想に對して、個人を社會の動的單位とし要素

とする個人主義的思想が固められて、當代の佛蘭西社會に對する飽くなきの憎惡と憤怒とを高めしめた。

新しき思想は舊き皮袋を以て包まれ得ない。煩鎖極まれる從來のあらゆる文藝的形式も、こゝに於て其の動搖を免れない。文藝の改革は多く先つ詩に始まる。一八八六年、ヴエルレーヌ起つて、外國の詩形を例にとつた自由なる韻律を試みて、始めてクラシックの詩型が破壞せられた。次いでマラルメが出る。そして一般思想界には、ノヴアリスや、エマーソンや、又はニーチエなどの反譯が切りに讀まれた。

二

革命を標傍して立つたブールジヨワジーも、自らの地位の安全を確められて以來は、もはやあらゆる革新的精神を喜ばない。そして政治の上に於ては素より、文藝の上にまでも、新しき智識者の敵となつた。

新代の靑年は、或はスノビストと嘲られ、或は犯罪的デレタントと罵られ、或はアナーキストと呼ばれ、或は又非愛國者と稱せられて、あらん限りの惡聲を受けた。何事にも個人的規則を求めんとし説明を求めんとする其の渴望は、直ちに利己主義であるとせられ、其の重々しき眞面目なる態度は、直ちに憂鬱病であるとせられた。殊に新聞紙の、其の判定の皮相なる、其の見識の卑吝なる其の態度の冷笑的なる、其の報告の不正確なる、遂に舊代人と新代人との間に超ゆ可らざる溝をつくつて了つた。

けれども此の呪はれたる新代人は、自らの批評的精神に確信して、敢て自らを辯解し説明せんとはせず、喜んで舊代人と分離して、自らの思ふがまゝに行爲して、此處に頑固なる靑年の一團を佛國社會の中に形づくつた。政府は彼等に官職の途を閉ぢた。斯くの如く國民の或る一部分と他の部分とが背離すれば、自然新精神は、思想から行爲になるの過程を急がざるを得なくなる。そして其れは只時機を待つのみとなつた。

三

斯くして何等かの社會的事件の現はれる度に、智識者は多數者から排斥せられて、少數者の味方に奔つた。少數者とはレヴオルユシヨナリーであ

る、アンチパーリヤメンタリストである、アナーキストである。殊にリオンに於けるクロポトキン事件や、又はアンリー事件などに際して、彼等は極力して此の少數者と共に政府に當つた。そして彼等は新政治に對する其の惡感と、自らの活動の渇望とを滿足せしめた。

のみならず彼等と此の少數者との間には、少なからざる思想のアフィニテーがあつたのである。彼等は社會的虛僞の容赦なき解剖に從つた。彼等は其の未だ知られざる新しき眞理を憧れ求めた。彼等は其の個人主義を社會改革の上に適用しやうとした。けれども當時の此の少數者は、不平家や夢想家や、犯罪人や、ヂレッタントや、或は正直なる勞働者の哲學家などの孤立したる小團體の運動に過ぎなかつた。そして其の主張する理論も、未だ彼等智識者の論理に饑ゑ科學に渇えたる熱烈なる慾求を充たすに足る程の、十分なる組織的のものではなかつた。又彼等の貴族的精神を滿足せしむべく餘りに平民的なものであつた。從つて此の少數者の中に全く身を投じたものとては何程もなかつた。

四

斯くの如くして彼等智識者は、久しき摸索と、研究と、ぼんやりしたる反抗と、又彼の所謂少數者に與へたる加擔との後は、遂に書籍によつて、舊代人の偏見を組織的に破壞する事を始めた。そして先づ其の打擊を蒙むつたものは、普佛戰爭以來勃興し來たつたミリタリズムであつた。

デカヴは其の『下士官』に於て、下士官の生活と風習と惡弊とを描き、アベル・エルマンは『騎兵ミズレー』の中に、ジュール・ペレンは『大砲』の中に、更に此の下士官の研究を完成した。ジョールジ・ダリエンの『ビリビ』は、亞弗利加に於ける戰慄す可き懲治隊の事實を曝露した。ゾラの『敗北』や、ポール・アダムの『群集の不思議』が、如何にリリカルにそしてリアリスチックに、虐殺の悲慘を描いたかは、既に人の知る處であらう。アルベール・ラントワヌの『兵營』は、步兵兵士の苦痛と其の道德狀態とを描いた多くの小說の一つである。又平時に於ける兵士の心的狀態を詳細に描寫したモノグラフとしては、クールトリヌの『リドワル』や『八時四十七分の列車』や『騎

兵隊の陽氣』等がある。古參兵の橫暴と陸軍學校の厭ふべき風習とは、マルセル・リユゲの『殉難の生徒』の中に公けにせられた。マルグリット兄弟の『災害』は、高等司令部の過失と責任と無能とを詳細に示した。

五

又風俗批評としては、先づポール・アダムが『風俗批評』や『凡人の勝利』がある。パナマ運河事件や議會制度の弊害などが、手きびしい痛擊を加へられてゐる。ジョールジ・ルコントの『侍者』は、選擧と議會と政治とのカラクリ仕事を描いた長篇小說として名がある。アナトル・フランスや、ブリユーや、オクタヴ・ミルボーなどが、裁判の根底に斧鉞を加へた事は、今更に此處に書き加へる要もなからう。

ブールジョワジーの要塞たる結婚制度は、エルヴユー、カーズ、キユレル、ドネー、ブリユー等によつて、官立の劇場に於て猛烈に攻擊せられたそして此の結婚制度に反對した小說の數は、殆んど擧げて數ふべくもない。ブールジョワジーの唯一の寶たる金錢も亦、少なからざる攻擊の對象となつた。

最後に、此等の文人と先きに云つた少數者との關係を少しく說きたい。佛蘭西の若い文人は殆んど總て、彼の少數者の新聞雜誌に寄稿し或は協力してゐる。『ランドウオール』の事は前號にも云つた。『ラ・ルヴユー・アナルシスト』は多勢の詩人や小說家を集めてゐた。『ル・タン・ヌーヴオー』は、每號文藝附錄を出して、諸文人の作物を公けにしてゐる。

ゾラの『木芽立』や『巴里』には、巧みなるアナーキストの描寫がある。けれどもアナーキストを描いたものとしては、ロニー兄弟に優るものはあるまい。其の『ル・ビラテラル』などは、同盟罷工者の俱樂部や集會を寫した、恐らくは佛蘭西文學中の嚆矢であらう。其の『マルク・フアヌ』にも、矢張り同じ描寫の斷片を見る事が出來る。

佛蘭西の一批評家アンリー・フイーラン・デユヴエールは嘗て云つた。『今や我が佛蘭西に於ては、小說家も詩人も脚本家も、皆んな隱れたるアナーキストである。中には公にさう云つて自ら誇つてゐるものすらある』と。

アンドレイエフの描きたる恐怖

山本飼山

不具なる十九世紀文明は人間社會に種々なる不安と苦悶とを齎らし、人間の胸奥に容易に拭ひ去る事の出來ぬ恐怖の影を投じた。我等十九世紀文明の影響を蒙つて居る人間は、その程度の如何を問はず、何れも皆暗い「恐怖」の塊を心の底に藏して居るのであるが、これが時としてコンベンショナルな日常生活の條規を突き破つて、我等をしてアブノーマルな狂的な行爲に出でしめる事がある。

レオニード・アンドレイエフは此の『恐怖』の影に其の鋭き眼光を向けて、恰も外科醫が解剖刀を揮つて死體を解剖するが如くに此の不可思議なる影を描寫したのである。

アンドレイエフは、その初年の作たる『虚僞』『沈默』等より「人の一生」『七死刑囚』等に至るまで、その作者としての氣分を少しも變へて居ない。彼は常に同種の題材を取扱ひ、此等の題材に就いて常に同種の感情を語つて居る。その短篇たると長篇たるとを問はず、彼れの作品より發する空氣は常に同種の色彩を以て讀者を包まうとして居る。一面より見れば彼れの作物は悉く單一なる題材を様々な形式に書き變へたるものに過ぎないとも云ふ事が出來る。而して此の題材――もし之を一言にして云ひ得るならば――是れ恐怖である。漠然たる不安より戰慄、絶望等に至る様々な種類を包容する恐怖である、或は寧ろ、有ゆる恐怖の中にて最も痛ましき特種の恐怖である。此の恐怖は自然に對する驚異の心とか、測らざる危險を恐る心とか云ふ如きものでない。此の恐怖が人の靈魂を訪づるゝ時、其人の周圍にある極めて平凡なる實在は忽ちに悲劇的な、避け難き、神祕的なものと變ずる。生と死との永久の神祕――是れアンドレイエフ作品の中心點である。此の神祕が彼れの作品中の人物を戰慄せしめ、彼等の平和を突如として奪ひ去り、彼等を生命のどん底より變化せしめ、遂に之を狂人となし、或は自殺に導き、或は犯罪の道程に進ましむるのである。

試みに初年の作たる『沈默』及び『虚僞』に描かれたる神祕を見よ。

茲に現はるゝ主人公は一見常人と何等異なる所なき一箇の人間である。人々は彼を愛しもすれば彼に憎みもする、彼を抱擁する事も出來れば彼を殺すも出來る。然し彼が何を考へ、何を感じて居るかは何人も想像する事が出來ない。彼れの額(ひたひ)の薄き障壁の奥に何物が潜んで居るかは何人も永久に知る事が出來ない。

而して此の不可解なる神祕は又『歸家』に於て更に著しく描かれてある。

曾て飄然家出をした青年が思ひがけぬ時に突如として父の家に歸つて來た。そして彼は今迄何處で何をして居たかと云ふ事を何人にも語らうとしない。彼れの周圍にある祖母、父、妹、奴僕等、全家悉く、此の平凡なるが如くにして不可思議なる實在の前

に在つて恐怖と戰慄とを感じて居る。

アンドレイエフは更に進んで『病院』に於て二人の患者を描いて死の秘密を語つて居る。

二人の患者は一日突然自已の頭上に死の迫つて來るのを感じた。二人は格別の動機もないのに死の切迫に對して烈しき恐怖を抱いた。彼等は何か黒い恐ろしい塊が寢臺の後方に佇立して自分達を凝視して居るやうに思つた。そして此の恐怖は益々烈しくなつて、遂に其の一人は猛獸のやうな姿になつて狂ひ出し、他の一人――憐れな田舍僧侶――は故鄕の暖い太陽の光を想ひ起して子供のやうに號泣した。

斯かる神祕は傑作『心』に於て物凄き色彩を以て讀者に迫つて來る。

主人公メジエンツエフ博士は自己の心を信ずる事深き人であつた。彼は自己の心が活々した、堅固な、確實なものである事を信じた。此の心は已に彼を愚かなる道德的偏見の覊絆より解放した。彼は自己を「自由人」であり「超人」であり神の一種であると考へた。然るに彼が全智全能なる心の思索力に大なる誇を感じて居た其の瞬間に、突如として「おれは狂人だ」と云ふ考が彼れの心中に閃めいた。彼れの明快なる心は忽ちに搔き亂された。恐怖は堅く彼を捕へた。我は果して眞に狂人であるのか、或は斯く思ふのは一種の幻覺であり、漠然たる恐怖の心であるのか。彼れの愛する「心」も此の問題に就いて最早や明確なる答を與へる事が出來なかつた。彼れの心は彼に叛いた。彼は學問を疑ひ智識を疑ひ自己の心を疑つた。而して此の「超人」は遂に常人の前にひざまづいて「我は眞に狂人なりや否や」に就いて明確なる返答を與へん事を懇願した。

露西亞の多くの批評家は、ヴイクトル・ユゴーが『惡の花』の作者の上に加へた言葉を其儘にアンドレイエフに適用して、彼を、『新しき身震ひを作り出す』作者であると稱した。

新しき身震ひ――然り我等は時としてコンベンシヨナルな日常生活の間にあつて突然恐ろしき身震ひを感じて、物凄い氣分に襲はれる事がある。小鳥の囀り、木の葉の囁き、子供の歌謠、女の微笑、斯かる極めて平凡な事實が、文明に疲れた我等の心に突然異樣な響を傳へて、我等の肉を震はせ、我等の血を凍らせる事が屢々ある。何故に我等は斯かる異樣な恐怖を感ずるのであらう是れ或は人生永久の秘密が此處に宿つて居るのではなからうか。將た又極端な形式的生活に惱まされた人間の精神が、何かの機會に乘じて自由な徑路を求めんとして狂的發作を現はすのではあるまいか。

兎にも角にもアンドレイエフの作品は現代人の暗黑なる一面を物語つて、其の不可思議なる心的傾向に就いて我等に暗示する所が少なくないのである。

家婦所得稅論

——バーナード・ショウの演說——

安成貞雄

これは文藝上の問題ではないが、ショウの生活の一部分もわかるし、ショウ劇を了解する側光（サイドライト）とならないものでもないからこゝに紹介する。

英吉利に婦人課稅拒絕同盟と云ふものがある。これは婦人に選擧權も與へないで稅金だけを徵收するのは不當だから納稅を拒むと云ふ主張の同盟である。處がマーク・ウイルクスと云ふ男が、其の妻君の所得に課せられた所得稅を納付しないで收監せられたのを抗議する爲めに、本年の九月二十六日に、カクストンホールで此の同盟の臨時會合を催した。そして其の席上、ショウは大要下の如き演說をした。

『是れ政府が一の改革―此の改革たる、何人も目前に迫り來るを知り、これを遷延するのは無知無謀の擧なるを知るに係らず―を行ふ事を拒んだが爲めに、吾々男性の上に跳ね返つて來た忍び難き婦人の跋扈に對する、男性の反抗の第一擧である。

今や、上は總理大臣より、男子たるものは一人として安堵の思ひをして居る者がない。私は家內が、座敷の隅で考へ事をして居るのを見る度每に、私なり、私の同性なりを絕望の境に陷れる方法を案じて居はしないかと心配しない事はない。私は婦人選擧權獲得運動者の會合で演說した事がない。私は、婦人にとつて有り難迷惑な援助を與へる無恥無用の男性の仲間入りをする事には御免を蒙つて來た。婦人は立派に自分だけでやつて除けられる（笑聲）。

私は幼少の時分に、婦人が丹精して子供と自分の爲めに家庭を作れば、夫が家財を賣り飛ばし、妻君と子供を抛り出して、飮んで了つた例を幾度も見聞きしてゐる。有夫婦人財產法はこれが爲めに制定せられ、夫たるものは、此の法の下にあつて、財產の責任を輕減せられ、家婦自ら其の財產を有するに至つたのである。然るに、其納稅の問題に至つて男子は犧牲となつた。ウイルクス君以前、私が旣に犧牲になつてゐる。

政府は附加税を課するに方つて、私に、家内の税金を納めなければならぬと云ふ。私は云つてやつた。私は家内の收入がどれほどあるか存じませんと。私は結婚した時に强つて申勸めて、家内へ私と別の銀行と取引させて居るので、家内の收入に關しては寸毫の知る處もない。知つて居るのは、家内が自由に使へる金を持つて居ると云ふ事だけである。そして屢々それを借用して凌ぎをつける事がある(笑聲)。當局は婦人が附加税を納付し得る法案を制定したが、一般納税者は依然として舊制度に循ふて居る。故にウイルクス夫人が自分の税金を拂はなければ、ウイルクス君が監獄へ行く。若し私の家内がさう云ふ事をすれば、私は監獄を出ると同時に別の妻を持たうと思ふ(笑聲)。已むを得ざる事である。

婦人は現在法律を蹂躙してゐる。レー夫人(ダブッンに於て ロイド・ジョージが演說すべき劇場に放火せんとせし婦人)は放免せられて居るが、私は夫人は暫く休養したらば又他の劇場へ放火するだらうと思ふ。私は劇場によつて生活して居るが、若し夫人が此の演說の記事を讀んだら、或は私の脚本を興行して居る劇場を燒きはしないかと思ふ。私は先頃政府にレー夫人を餓死せしめよと云つた。其後今日まで二週間、私は生れて以來最も亂暴な手紙を澤山受取つた政府は速に婦人に選擧權を與へて、此の困難を救ふ可きである。』

猶ショウは自席に復して、今晩私刑に處せられもせずに云ひたい事を云はせて貰つたのは有りがたいと云つた。

ウイルクス氏の收監に抗議する議決は、滿場一致を以て通過した。そしてサングウイル氏は其抗議に同情を表する手紙を送つて、『財產相續權を有する婦人と結婚するのは、男子の破滅となるかも知れぬ』と云つた。

富は文學や美術を保護し奬勵すると云ふ。さうだ、しかしそれは露が野の草を濕す やうにぢやない、丁度主人の鞭が、飼犬を勵まして矢鱈に尾をふらせるやうにだ。

――榮――

思索人

—動物人・機械人・思索人—

榮

一

比較人類學の教へる處に據れば、人の頭蓋は、そして又其の容れてゐる腦髓は、大古の粗石器時代以來のみならず、もつと比較的に近い時代の三千年この方、著しい進歩と發達とを遂げてゐると云ふ。

あらゆる人種は、其の始めから、互に相衝突し、相混交し、相累重し、時としては又互に相驅逐し合つてゐる。そして其の各人種の間には、夫れ〱の否む可らざる体型の相異がある。けれども今概括して見れば、あらゆる人種の口吻の突出が和らぎ、クロマニオンや何にかの猿そつくりの型が著しく消滅した事は爭はれない。そして今日でも現に、齒の數が文明人の間には減つて行く傾きがある。要するに顎のあたりの部分が小さくなつて、額のあたりの部分が漸くに大きくなつて來る。思索の働きが増すにつれ愈々其の器官の完成が求められる。

吾々人類と云ふ種屬の始め、詳しく言へば、僅に節のある言葉を吃つてゐた事を以て、其の兄弟の類人猿と區別せられた遠い太古に於ては、自己保存と生殖との事に限られてゐた其の思想を作り出すためには、何にも大きなそして純化した腦髓を持つてゐる必要もなかつた。けれども、やがて人類が其の周圍のあらゆる力を防禦し更に猶攻撃するやうになつてからは、そして又、物質上の慾望の滿足が多少確められるやうになつてからは、そろ〱と思索の必要が生じて來た。動物人は更に優秀なる型の人類に進まればならなくなつた。

二

しかし祖先の影響はなか〱に消え去るものでない。改善の歩みは遲い。そして今日猶、時として動物型の人が突然として吾々の間に出現する。

胎兒が九ヶ月の間母の胎内に在つて、漸次虫となり魚となりおたまじやくしとなり四足獸となつて、其のあらゆる祖先の動物の型を再現する事や、又は胎兒の間に其の發達を礙げられて、下等動物の型を持つて生れ出た子供の事などは云ふまでもない。

しかし其の身體の上や又は其の精神の上に於て、或る動物、しかも傍系の關係しかない或る動物を思はせるやうな人を見るのも決して稀れな事ではない。

ブルドッグやむく犬の型の、そして又其等のもの丶性質を持つた、犬人や、額の低い頰骨の尖つた、眼の鋭い、殘忍な本能を持つてゐる狼人や、長い顏の狡猾な狐人や又は羊人や獅子人や猿人などに出つ食はすのも決して稀れなる事ではない。

けれども斯んな型の人は、今でこそ例外ではあるが、過去には規則であつたに違ひない。思索人はまだ存在しなかつた。只動物人のみがゐた。其の肉體上や精神上の性質が、啻に其の直接の祖先の類人猿のみならず、又其のいとこ位の他の哺乳類にも似た畜生人のみがゐた。

そして今日吾々が稀れに個人の間に見る事の出來る此の動物人は、群集の間に猶甚しい勢力を殘してゐる。昔し豫言者や軍將の一擧手一投足は、忽ちにして群集を騷ぎ出させて、他の群集の上におどりかゝらしめ、遠い遠い時としては想像の國に迄押寄せしめたものである。トロイ、カルタゴ、ローマ等の戰は皆是であつた。猛獸の餌食に與へられた基督教信者の前に、そして少しく下つては、血の臭に餓ゑたるインキジ

ションの執行人に投ぜられた異教徒の思索家の前に、手を打つて喜び叫んだ群集も之れであつた。けれども今日の群集を見よ、アナーキストの上に吠えかゝつた彼の群集は、獸の群と云はずして將た何んと云ひ得やうか。孤立して見れば物の理窟も分り、隔世的遺傳の殘忍性から解かれたやうな個人も、一度群集の勢力の下に投げ入れられば、再び舊との猿に歸り、犬に歸り、狼に歸る。

三

動物人はやがて機械人となつた。今日の多數者は皆此の機械人である。

彼等は其の祖先の食人種の殘忍は殘してゐないが、未だ其の思想の生きた光りと、其の個性の自覺とを持つてゐない。時としては其の野蠻時代や未開時代の殘忍性と共に意志し行爲するの勇氣までも失つてゐる。彼等は猛獸の域を脫して、機械となつた。規則とか制度とか習慣とか云ふ重荷の下に壓しつぶされて、たゞ尊敬の恐怖を以て其の重荷を仰いで、傳習の奴隷となり、周圍の奴隷となり、其他あらゆるものゝ奴隷となつてゐる。狼犬が番犬となつた。そして自分の傍へ同類の來るのを嗅ぎつけると、急に齒をむき出して、ひとり立ちの弱い孤立者に噛みかゝる。

けれども昔しからの動物人と今日の機械人との間に、更に思索人が起りつゝある。思索人は又近代人とも云はれる。

近代人の腦髓には、多少混雜した思想が湧き返つてゐる。しかし彼等はまだ受働的たるを免れない。過去の重荷はまだ彼等の上に壓つかぶさつてゐる。彼等はまだ自由思想家にして祈禱會に行くの徒である。

斯くして近代の思索人は、周圍の爲めに束縛せられ、窒息せられて、そして其のクワリテがヴアイスに變つて了ふのが多い。勇氣は無感覺になる。緻密は狡猾になる。寛仁は盲目になる。先見は利己になる。

けれども近代人の一部には、其の理智の純化が、鐵火に遭ふ度に益々鍛練せられて不斷の鬪を鬪ひ、しかも其の間に彼等の溫柔と鋭感と細心とを持續させて行く部類がある。

四

しかも此の種の思索人は、猶甚だ少數ではあるが、しかし益々增加しつゝある。彼等の中の最も偉大なる思索家の周圍には、彼等の前に跪いて讃歎の眼をみはりながら彼等の言を聽く數人或は數十の弟子と云ふやうなものは、もはやゐない。けれども數千數萬の人が彼等と同じ言葉を語り、同じ精神的生活を營んでゐる。そして跪づいて聽くかはりに、彼等と討論して、却つて彼等の思想を補足し、或は修正してゐる。

今日の人類の型は思索人の型である。そして一方に殆んど超人とも見る可き大思索人が存在すると共に、一方には又、過去の動物人や畜生人が殘つてゐて、此の二者の間には自ら動く事を知らない機械人や、又は多少自ら動き出して其の手足を損傷した所謂近代人に滿ち〳〵してゐる。

吾々は本當の思索人たる超人に進まなければならぬ。動物人固有の勇氣と機械人が胎んだ思索とを左右の手に提げて、飽くまでも驀進しなければならぬ。

少なくとも所謂近代主義の詭辯に染まざるものにとつては、思想と行爲との間に溝を設ける程可笑しな事はない。思想は既に行爲の始まりだ。

——榮——

深夜の瞑想

寒村

暗黑と沈默に包まれ、ベッドに横はつて瞑想する眞夜中に、余を襲ふものは是等の想ひである。此の時、余は死を想ひ、墓穴を想ひ、煙滅を想ふ。余は冷たい地中に腐爛し、解体して行く余自身を想像する。余の肉は蟲ケラに蝕まれ、骨は腐り、血は凝結して汚ない物質に凍り塊まり、臟腑は醜惡な物體に變じたのを想像する。そして此のむさくるしき屍骸の上に、余が最後の記臆を銕せる重き石を載せた、數尺の土が積まれて居る。

余が室の暗黑は一層深くなつた。かゝる幽暗な想像は、余が脈管の血を凍らする。余は顫慄した。余は暗黑を恐れて、堅く、堅く、眼を閉じた。が強い、不明な慾望——自分の生きて居る事を感じたい、存在を確かめたい、感じ且つ考ふる世界の一部分たる事を意識したい慾望は、余が内部に目さめて來た。そして猶、余はだんだん余自身の裏に後じさつて行く。余は自分の躰を出來る限り少さくして、ベッドの被ひの下に隱れる、死物狂ひになつて、墓穴とその恐怖とにカヂリ着きながら………。

然しだんだん、狭い墓穴が廣く、そして大きくなつて行くやうに想はれる。墓穴の匂ひと暗黑とは、凡ての空間に充滿するまで擴がり、增して行つた。凡てはその爲に包まれて了つた。そして凡ては、深い煙滅と昏迷との無限の空虚の中に漂ふて居る。余も亦、彼等と共に、煙滅と破壞との此の底無き深淵に、迅速に沈みつゝあるのである。死と忘却！、余は是等の語の、死の如き悲歎として鳴り出でたのを聞く。四圍の暗黑は、その恐怖を以て充された。暗黑の波は「こういふ恐ろしい語の形になつて、周圍を領して居る暗黑の上に、更にその背景として打ち寄せた。彼等は沈んで行く、そして際限なき絶無の幽谿に、深く、深く、陷沒するに連れて、余が靈魂をも逐ひ立てる。

是等の瞑想は、余が苦役と患難との一日の後、ベッドに這入つた眞夜中に余を襲ふ彼等は此の休息の時間に、救ひの如く余に來る。余は余の元氣として、亦余の慰藉者として、彼等を考へ出す。余は實に、余が悲哀と苦痛との慰問者として、彼等を呼び寄せるのである。

青春の幸福な日には、余はもつと樂しい想像を有して居た。當時、閉ざされた眼瞼と、身邊に群がつた夜の影とを以て、余は猶且つ愉快なる日光を視た。余の想像は常に輝やける天に依て暖かく、そして明るく照された生を與ふる土の上に、娯し氣に踊れる人々、生ける人々の微笑める、晴れやかな顔の間に在つた。然しその時から、生存は余に對つては夢でなくなつて、現實となつた。そして余の想像力がその幻想を作り出す材料も、その時から變つた。光明と幸福とは、余の心の中で腐敗や奸惡と結合し、暗黑と悲慘とは、正廉や純潔と一致した。人道の封印を捺した余が愛する、昔馴染の人間の顔を、余は今や塵埃と泥土との間に發見する。幸福の焰は、とうの昔しその面上から消へ失せて、その代りに異なつた火、憎惡と叛逆との火を以て燃やされて居る。余はまた、是等自然の美しき幽境の今は野獸、野蠻人、食人種等の住家となれるを發見した。彼等はそこを迂路つき、そこに餌をあさり、そこに虐殺を行ふ。

生存と腐敗のかゝる上部の區域に於ける一日の後、「罪惡と汚行を以て替へられた、かゝる美しき風景の間に於ける數時間の後、

余は眞の人間の心を以て話しをする爲に、眞實の人間に會はうと思つて、深く、深く冷めたい墓穴に潜つて行く。余は救ひに對つて、慰藉に對つて、そこに飛んで行く。墓穴の暗さは壓しつくるやうだが、餌物を裂く虎を照し出す日光ほど殘酷ではない。その界限は挾いが、汝の肉體も靈魂も閉ぢ込める、上部の區域の牢獄よりも遙かに廣い。死の思索は、やゝ生存を緩和する。それのみ、鐵鎖で生活の岩に縛り付られ、人間社會の禿鷹に食ひちぎられ、患み苦みつゝある奴隷が公然持ち得る希望なのだ。

而して、此の全宇宙が形なき虛無となつたならば、それは何といふ慰藉であらう。凡ての生命が滅亡し、凡ての嘆息が消へ、凡ての涙が乾き、野獸の如き活動の喧騷と擾亂とが全く終つたと想像するのは、何といふ愉快であらう。凡てかくの如きものが、暗黑と忘却との底なき海に沈んだと想像するのは、何といふ悦樂であらう。視よ!、如何に是等の野獸が蹲まり、慄き、そして顫へるかを!。彼等は破壞と死との近づき來る大洪水の前に後じさる。それは氣の狂つた旋風のやうに來る。それは一瞬間に、是等の野獸を空中高く揚げる。今、彼等の骨は割れ碎け、その肉は塵のやうに壓し潰される。狂暴なる憤怒は凡てのものにとりつき、死の暴風雨は更に強く、更に烈しく荒れ狂ふ。凡てはその前に壞ぼされ、凡てはその前に消へ失せた。やがて暴風は收まり靜穩と平和とはふたゝび支配するが、最早や如何なる生物も殘されて居ない、萬物は絕無に歸して了つた。「死せる人々」は深く深く、夜と煙滅との空洞に沈んで行く。

余を慰さめるものは、只だ此の想像のみである。余の靈魂から、生存の苦惱を消し得るものは、只だ此の光景のみである。疲れて、また一日の光景の恐怖で壓迫された時、余は眞夜中に休息を求める。余は余を祝福すべく、余を保護すべく、そして余の眠りを休養と精勵との源とすべく、この恐ろしき幻想を余の前に描き出すのである。

余のベッドを護る天使は、墓穴の恐怖である。彼等のみ、余の靈魂中に咆哮し、狂亂せる、憤怒と悲痛との波を靜め能ふ。彼等のみ、余の心の核を貫かんとする、不滿と叛逆の毒矢を止め能ふ。今時、死の慰藉の無い生存は、實に地獄の呪詛にも等しいものである。

——ロゴツフ——

亡き友

カエラ・フイグネル女史

勇ましき友は逝けり
壙墓を知る者あらず
生命なき骸の上に
そゝがるゝ涙さへなし。

墓に運びしは知らざる手なりき
十字架なく欄干なし
豈墓標を飾れる光榮ある名をや
卑しき苔と草の葉と
僅かに神秘なる地點を蔽ふ。

渦卷く波のみ獨り知れる如く
怒りつ狂ひつその岸を打てど
あゝその咆哮のいかに烈しくとも
悲しき物語りを語るに足らず。

（寒村譯）

太陽の光線

若山牧水

犬は犬好きの人をよく見わくといふが、この犬の眼の自分に親しげなことは。

無論、そうして働いてうまい物を食ふのもいゝそうしてゐ給へ、君はほんとに健康（じやうぶ）そうだ。

金がほしい、せめて本の自由に讀めるだけ。閑になれば、なるで、斯んなことを思ふ。

朝を思索の時間と定め、午後を讀書の時としやうか、この山に居る間。

さういふこともあらう、そうであらう、何にしろ自分は自分で忙しい。

考へ出せば、みな、からつぼのやうに思へてくる、机の上の冬薔薇の美しいこと。

太陽の光線は地球の表皮だけに、功能があるのだらうか、などゝとも考へる。

自分をたづぬるために孔を穿り、孔ばかりが、若し、殘つたら。

散つて見れば案外な花辨の大きさ、薄さ、紅（あか）さ冬の夜の机の薔薇。

朝など、何だか自分が薄い皮でゞもあるやうに思はるゝ時がある。

それで、牧水がきらひになつたとは、よつぽどけちな人でばしあらう。



You Never Can Tell.

土岐哀果

わらへ、わらへ、
はらわたをうらがへしにして、
とにかく、かんがへずに、
わらへ、わらへ。

わらへ、わらへ、
ふるい人間を、ふるい世間を、ふるい戀愛を、
ふるい舞臺を、ふるいセリフを、ふるい身ぶりを
ふるい怒(おこ)りかたを、ふるい洋服を。

"Shaw ?" —— "Pshaw!"
や、東儀先生が目をむく……齒をもぐつかせる。

ホウ、土肥君がハネる。——
あのハネかたを、科學的に、どう說明したものだらう?

あ、クランドンの奥さん、さあ、
ごいつしよに、Sattyokodati をやらうではありませんか。
あら、いやですわよ?
フン、
そんなに年よりぶるものぢやありません。
おたがひにわかいのですからね。

ふるいなあ!

わらへ、わらへ、
むちやくちやに、めちやくちやに、
かんがへずに、とにかく、
わらへ、わらへ。

萬歳、萬歳。

"You never can tell
バカ!

(十一月十七日、有樂座にて)

美はしきエレン

佐藤緑葉

「美はしきエレン」の曲は
靜かなる海の水の寄するが如く、
或は又旋風の唸るが如く、
樂堂の天井に、白壁に、はねかへる。

眼を閉づれば、吾が腦は微かに疼き、
網膜に火の輪は映る。
夏の日の暑き晝寢に、
耳近く群る虻の
呟きつ、遠のきつ、もつるゝ氣わい。

黑きかな、黑きかな、
樂壇に落ち散る木の葉。
夜の如く、五位鷺の如く、また吾が心の如く、打
ちしめり、しめやかに絃を彈つ、
其の聲の悲しき叫び！

また見よ聽衆の愁へる顏を、
その黃なる皺める頰を。
感激も、興奮も、遠き日に忘れ去れり、
犬の如き屍體となりて、
默然と椅子にうなだる。

セロは鳴る、ボウボウと、
ヰオリンは女樂師の、喪の袖の白き襦袢に、から
まりて頻にうめく、
色のない樂堂を悲しむ如く、
或はまた廣やかなる大空を戀ふるが如く。

過ぎし日のわが心よ、
爭ふて別れたる戀人よ、
瘦せし人、蒼くして幽靈の如き人――
吾が腦は今はシネマか、クラリネットか、痛し〳〵、
銀笛か、吹き破れ、吹き破れ。

「美はしきエレン」の曲は、
靜かなる海の水の寄するが如く、
或はまた旋風の唸るが如く、
樂堂の天井に、白壁に、はねかへる。

（上野音樂學校印象）

藍色の眼

ゲオルグ・ラフアロヴヰッチ作
安成二郎譯

彼女は世界上で一番美くしい眼を持つて居た。青みを帶びた灰色の、殆んど楕圓形のその眼は、甘へるやうな表情の中に、豊かな幸福と、幽玄なる女性の神秘を籠めて、絹のやうな睫毛の蔭に潜んでゐた。眉毛は畵家の筆に描かれたやうに、綺麗に揃ふてゐた。濱の眞砂の美くしい洋紅の隈を想はせるやうな柔らかい色を含んでゐた。そして瞳の海の波間には、人生の夢が靜かに浴みして居た。此の可憐な眼の、十五の無邪氣な處女の上にどんな事が起つたか？

彼女はある町から何ヴエルストか離れた、小露西亞のある村に兩親と一人の兄と一緒に住んで居た。父は村の百姓の間で、恐らく最も心の滿足を得てゐたが、その滿足は間も無く不幸に變つた地主の執事の獨逸人に地代を嚴しく取り立てられ、租税を納めて了ふと家には何も無くなつた。

ドミトリ・イヴニッチは他の百姓の家族よりも生活に困らなかつたが、彼の眞の幸福は、優しく善良で家政上手の妻と、骨惜しみをしない 達者な息子があつたことで、殊に一番の寶は娘のタニアであつた。娘の藍色の眼は美くしい睫毛の間に絶えずダンスをしてゐた。そして、黄金色の髮は村の女達の羨望を集めた。實際百姓等の嫉妬の的は、ドミトリの家族の生活向きではなく、娘のタニヴーシヤであつた。けれど、嫉妬は露西亞の百姓の缺點ではない——ただ人に傾倒し過ぎるといふまでゝある。兎もあれ、善良で愛嬌のあるタニアは誰にも可愛がられた。

村では、一人としてタニアの身の上に不幸が來やうとは思はなかつた。いつまでもタニアが美くしい聲で唄ふのを聞きたいと願つてゐたが、駄目であつた。富に渇する銀行家と、功名心に燃える大臣と、野心の強い政治家といふ動物とが、滿洲で恐ろしい戰爭を起した。そして、タニアの兄は兵に徵されて出征した。これが第一の打擊であつた。兄は輕い負傷で五ケ月後に送還された。嗚呼何故彼は歸つたらう！　眞面目な息子、信實な兄健康で元氣のいい働き手であつた彼は、生活と子

としての義務について、まるで違つた考になつて歸つて來た。彼は、人の補助を得て、村から町へ通ふ客馬車を始めた。酒も飲み習つた。馬を虐く鞭ちもした。毎日いい賃錢になつたが、貧乏してゐる親父を構ひつけなかつた。イヷン・ドミトリッチ——これが彼の名である——は、間もなく全で仕事を止めて、オデッサへ流れて行つた。ある日オデッサから歸つた百姓が、美くしいタニアの兄が、其處で船乘相手の女郎屋の番頭になつてゐることを話した。百姓は、イヷンが得意になつて語つてゐた戰爭談を聞いて來た。

「まあ聞いて吳んれえ、敵の奴等と云ふな小つせい獸でよ。露西亞人の眼玉が食ひてえんだ。萬も億も數へ切れれえ程打殺したが一匹斬れア十も二十もその身體から跳び出すんだ。いや、實に面白かつたよ。處で、時々兵糧が渡られえと、その敵の奴等の死骸でも生きてるんでも構はず食つてやつた。酒? それよ。上等飛切のチドオがあらア、いつかなんざア、沸々泡の立つてる酒を、二本も士官から取つた。ヵ、奴さん、一人で飲み切れれえんだ。馬鹿めが」

その百姓はもつと聞いて來た。一人の船乘が、その自慢話に茶を入れると、ドミトリ・イグニッチの悴は、船乘を墓と牝驢馬の混血兒と罵つた揚句に、精力と美くしい目で、女から金を卷き上げることもしない無益者と云つた。

此の悖德の噂は、微かながらタニアの耳に達しない譯に行かなかつた。美しい藍色の眼は泣き呌んだ。此の眼はもつと悲しい運命を持つてゐる。

夏の終りに、地主が、半月の豫定で村へ來た。彼は此の可憐な百姓娘に目をつけて。その歡心を買ふにつとめた。第一打擊に氣折れしたドミトリと、悲しみに心を蝕ひ込まれた母親は、娘に注意を怠つた。そして、美くしいと云ふ評判を聞き馴れて、不知不識增長してゐたタニアは。何時の間にか罠に落ちた。地主は、もう十五日の滯在期が過ぎたが、猶ほ出發すると云はなかつた。『百姓の娘は我々のために生れたものだ』と、紳士といふものゝ道德觀できめて、彼は無暗に言ひ寄つた。

ある午後、愛馬に跨づた地主は、村を出て林の方へ行つた。タニアは林の端にゐて、小枝を搔き集めてゐたが、蹄の音の近づくのを聞いて立ち上つた。そして、顏を赧くして頭を下げた。短かいスカートを着けて、前額に半ば髮のかゝつた容姿

は何時もより美くしかつた。

「今日(こんにち)は、タニウーシヤ」と地主は呼びかけた。

「コンスタンチン・ペトロウヰツチ」

「もつと打ち解けたらいいだらう、タニウーシヤ、れ、何故コスチヤと云はないの？」

地主は、馬から飛び下りて手綱を持ち替へながら、片手で娘の指をとつた。

「離して、どうぞ離して」

「どうしてそんなに餘所々々しいの、タニウーシヤ、可愛い鳩さん、れ、私が恐いの？　誰もお前のやうな可愛い小鳥をいぢめアしないよ」

さう云つて娘の手に接吻した。

驚愕(びつくり)して逃げやうとする娘の手をとつて、彼は林の中へ連れて行つた。魂が牢の中に閉ぢ籠められたやうに、タニアに思はれた。タニアは此の男を戀ひしてゐることを感じた。しかし、彼が何か惡い事をするかも知れないといふ不安が、心に起つたならば、タニアは逃げ出したであらうが、此の不安は出て來なかつた。戀に陷ちた女の絶對の信頼と、その所有地に住んでゐるといふ無智の服從心から、此の立派な地主は處女の心を占有したタニアの胸は動悸して、息は切れ、睫毛は顫(あらは)へた。けれど、藍々の眼には何の恐怖も見れなかつた。

彼は、娘の額に、唇にと接吻した。あはれな、無邪氣の娘は、今は身を守る力を失つたやうに見えた。涙は眼に流れた。男は抱き寄せて、それを拭いてやつた。

「タニウーシヤ、可愛いエンゼル、私のラヴをしてゐるのが解らない？　れ、云つて御覽、お前の綺麗な目に云はせて御覽、些しは私を愛して呉れるの？　私に可愛がられたいと思はない？」

「不可ませんよ。コンスタンチン・ペトロウヰツチ、離して頂戴」

「いいえ、離さない。可愛いタニウーシヤ、お前を可愛もるのがどうして惡いの？　私と結婚すれば立派な貴婦人にしてやるよ。お前はペテルスブルグの一番の美人よりも、もつと美しくなれるよ」

彼はタニアを抱いて、幾度も幾度も接吻した。そして、いたいけな此の子供は遂ひに、戀と信頼に囚はれて、自分を護ることを棄てた。

村の百姓等は、田畑の仕事に取り扮れて、何が起つたとも知らずにゐる間に、二人の情人は幸福な數日を暮した。やがて、地主の出立の日が來た。

「コスチヤ、何時歸つてゐらつしやるの？」

「一ケ月經てば。待つておいで。其の時結婚して、お前のお父さんやお母さんと呼ばうれ、そして、お父さんとお母さんと樂しく穩やかに、此の村で暮してゐる間に、私達は旅行をしやう。年中雪の降らない美くしい國や、年中雪の消えない珍らしい地方を見

せてやらう」

「コスチヤ、私には此の村よりいい土地はありませんわ。貴郎と一緒でも此處を出るのはいや。そんなこと被仰られると、私はもう貴郎に棄てられるやうに悲しくなつて……。れ、考へて下さい此の村が一番ですわ。私にばかりでなく　私達に…貴郎に……」

「一ケ月經てば。可愛いタニヤーシヤ、一ケ月經てば」

タニアが涙を拭いてゐる間に、地主の姿は村の方に消え去つた。

翌朝、タニアは獨り殘された。

一と月中、タニアはいかにも樂しく、喜ばしげに唄つてゐた。しかし、月の終りに、地主は歸つて來なかつた。タニアは唄はなくなつた。手紙を書いたが、返事がなかつた。すつかり氣拆れして了つた。日が經つに從つて、腹に宿つた兒の動くのが感じられるやうになつた。タニアは小作の監督や給仕人などに縁付けられて、主人の子を生む女のやうな氣にはなれなかつた。タニアは村の河へ身を投げたが、恰ど通りかかつた百姓の息子に救はれた。

ドミトリの家族の上に落ちて來た、此の第二の不幸が、村の間に廣がると、父親のドミトリ・イグニッチは勿論、タニアを可愛がつてゐた百姓等は憤怒した。皆ヲドカを飲んで地主を罵つた。年老つたドミトリは狂氣のやうに叫び立つて、絶望の咀を浴せかけた。

「地主の獸め！　勝手な眞似をしアがつて、ザアのやうな奴だ。豚め！　悪魔にとつつかれろ！　ベラベラ饒舌りアがつて、女の子をだましアがる。毒虫め！」

百姓等は益々暴れ廻つて、ヲドカを煽つた。とうとう一人は叫び出した。

「全くだ。だますに事を缺いて、タニア・ドミトリオヴナをよ畜生め、彼奴の家を燒き拂へ、あの化け物に火をつけろ」

村では夕陽が靜かに沈む頃、村から離れた地主の家が燃え上つた。

愚鈍のために滿洲の戰爭へ出陣することを免れた、一將軍の娘と婚約して、舞踏會から歸つた、地主のコンスタンチン・ペトロウヰッチは、室へ入ると、此の災禍を報じた電報が來てゐた。

『オ、兇徒、土匪！』彼は絶叫した。『直ぐに息の根を止めてやるぞ　』

恰ど其の時刻、母となつた少女は、半狂亂の樣で、町の方へ歩いてゐた。――其處で恥をかくさうとして。

人と超人

バアナアド・ショウ作
堺利彦譯

「人と超人」(Man and superman)はショウの最大の作です。梗概を作るよりはと思つて、遂に全文を譯する事にしました。色々説明を加へたい事もあるが、それはマア後に譲つて置きます

第一幕

レーバツク・ラムスデンが書齋で朝便の手紙を開けて居る。書齋は綺麗にドツシリと装飾せられて、相當の資産家たる事を示して居る。そこらに塵一本落ちて居ない所から見ると、こゝには少くとも二人の女中と一人の小間使とがあり、二階には一人の取締があつて、隨分念入に拭きこんで掃除がしてあるらしい。それからレーバツクの頭も美く光つて居る。キツト天氣の好い日には、遠方の陣營に對し、チヨツト頷いたばかりで射光命令を傳達する事が出來る。尤も此人は、其他の點に於ては一向軍人らしくない。其ユツタリと落ちついた所、其鷹揚な上品な所、其の引締つた口元に自然ユルミを生じて、餘裕と自重とを示した所は、どうしても實業界に成功した人に違ひない。彼は只立派な身分ある人と云ふ丈では足りない。どうしても身分ある中の又身分ある人、重役中なら取締、議員中なら議長といふ品格が備つて居る。モウ直き眞白になりそうな灰色の髪の毛が四房、両耳の上に二房と、張りだした兩顎の角に二房と、キチンと對を成して生えて居る。黑のフロツクコートを着て、春の事とて白のチヨツキを着て、そして青とも黑とも付かぬ、丁度紳士連の宗教と調和する樣な色合のズボンをはいて居る。今日はまだ外出しないので、スリパアをはいて居る。靴はチヤンと彼方のストーヴの側に置いてある。別に速記帳やタイプライタアを控へた秘書役の樣な者の居らぬのを見ると、此御大家にまだ當世風の餘り吹き込んで居らぬ事が分る。

レーバツクの年齡如何。思想劇に於いては是が大切な問題となる。彼の若盛りが千九百六十年代であつたが、八十年代であつたかと云ふので、總ての事が決定せられる。彼は其實、一八三九年の生で、少年時代からユニテリアンであり、自由貿易論者であり、又「種の起源」の發行當時からして進化論者であつた。故に彼は自ら常に新思想家を以て任じ、大膽なる改革家を以て任じて居る。

彼は今机に向つて居る。其の右側の舞臺のハナは見晴しの窓になつて居る心持、彼れの左手は即ち舞臺正面の壁で、立派な本棚があつて、眞中より少し彼方に當つて入口の戸がある。彼れの向ひあつた壁に沿うて二つの半身の塑像が立つて居る。左手のはジヨン・ブライト、右手のはハーバート・スペンサア。そして其の二つの間にコブデンの肖像と、マルチノー、ハクスレー、エリオツトの引延し寫眞などが掛けてある。彼れの後の暖爐の上には、眞黑になつた先祖の肖像畫が掛つて居る。

彼れの机の向ふには來訪者の爲に椅子が一脚置いてある。外に椅子が二脚、二つの塑像の間に置いてある。

小間使が來訪者の名刺を持つて入り來る。レーバツク受け取りて機嫌よく頷く。氣に入つたお客と見える。

ラムスデン　こちらに通せ

小間使出て行きて來訪者を伴ひ來る。

小間使　ロビンソン樣で御座います。

ロビンソン氏は非常に綺麗な青年で、誰でも直ぐに此劇の大立者だと思ふに違ひない。一つの劇にこんな立派な男役が幾人も出る筈が無い。其のスラリとした姿、其の上品な新調の喪服、其の細面のキチンとした恰好、其のシヤンとした小い口髭、其の無邪氣らしい晴やかな眼、其の若々しい色艶、其の房々とした、縮れのない、好い加減な色合の、美く搔き分けた髮、其の人の好きそうな眉毛、其の眞直な額、及び其の恰好の美い頤、總てが戀をして跡で苦しむといふ相である。そして其のマジメな、熱心な、遠慮勝な、親切らしい所が、如何にも好人物たる事を示して、深く人の同情を引くに足る。彼れが出て來ると、ラムスデンの顏には忽ち此の若者を愛する老人の情が現はれたが、若者が其の喪服と顏とに悲みの色を示して進み寄る時、老人の顏にも亦深い悲みの色が浮んだ。ラムスデンも此の悲しき事件を知つて居るらしく見える。來訪者が無言のまゝ机の前に近づくと、老人は立ち上りて手を差しのべ、無言のまゝ机越しに握手する。其の長き、力の籠つた握手は、双方に共通なる悲しき事件が最近に起つたるを示すに足る。

ラムスデン（握手を終りて機嫌を取直し）　あゝマアどうも仕方がない。なあオクタビアス。いづれ一度はある事だ。サ、サ、座りなさい。

オクタビアス　椅子に腰かける。ラムスデンも元の席に着く。

オクタビアス　ハイ、どうも致方が御座いません。けども、私（わたくし）は非常にお世話になつたんですから。あの方は全くモウ私の父に代つて私を世話して下すつたんです。

ラムスデン　それはのウ、あれには男の子が無かつたんだから。

オクタビアス　でも女のお子さんはありながら私の妹にも矢張り私と同んなじ樣に善くして下さいました。それにあんなに急に亡くなつてお了ひなすつて。私は兼々から、私が決して此のお世話を仇やおろそかに思つて居ないと云ふ事を十分にお話し申して、厚くお禮を申上げたいと思つて居たのですけれど、ツイ其の機會を待つて居ます中に、急にこんな、思ひも掛けない事になつて了ひまして。私の心中は遂にあの方に知られずに終りました。（とハンケチを出して飾り氣もなく打泣く。）

ラムスデン　ナニ知られずに終つたとも限らない。チヤンともう善く通じて居るかも知れない。

まあ〳〵オクタビアス、そんなに悲むものでは無い。(オクタビアス、氣を直してハンケチを放す。) そう〳〵それで宜しい。マアちと私の話でも聞きなさい、慰めにもなろう。私が最後に、丁度此の部屋でだあれに會つた時にの、あれが斯う云つたよ。『タビーは實に氣の好い、親切な者で、世間には隨分男の子供を澤山持つて、そして何一つ柔しい仕向を受けて居ない者もあるが、それに比べるとタビーは私の爲に本當の子よりも遙に增しだ』ツてね。ソーラ、あれがソウ云つたのだからお前もそんなにクヨ〳〵する事は無い。

オクタビアス　ラムスデンさん、私は又、あの方がヨク斯う仰つしやるのを聞きました。『私は此の世界中で本當に親切な人を只ッた一人見た。それは外でも無い、レーバック・ラムスデンだ。』

ラムスデン　ナニそりやヒイキ目といふものさ私等は無二の友人だつたからのウ。それから何だよ、まだあれはヨクこんな事を云つて居た。尤も今そんな事を話して可いか何うか分らないが……

オクタビアス　あなたが可いと思召すならお話し下さい。

ラムスデン　それはの、あれの娘の事だがの。

オクタビアス(熱心に)　あの、アンの事ですか。ぢやラムスデンさん、ぜひ何うかお話し下さい。

ラムスデン　それはの、マアつまり斯う云ふのだ。お前が本當の子で無くて却つて仕合せだ。何故といふに、いづれアンニーとお前とは……(オクタビアス「著しく顔を赤くする。」マアこんな話は仕ない方が好かつたかも知れないがの。然しあれはマジメにそう云つて居たよ。

オクタビアス　イヤ、そりや迚も私にや駄目です。私はあなたの御存じの通り、富とか地位とか云ふ事は少しも考へて居りません。そんな事の爲に騒ぐ氣には何うしても成れないですもの。そりやアンは非常に好い氣立なんですけれど、然し丁度そんな華々しい事の眞中で育つて居るのですから、大きな野心が無くちや男の値打が無い樣に思つて居るんです。さうしてアンはちやんと善く知つて居ます。私見たいな者と結婚すれば、成功なんて事は棄てゝ了つても、少しも耻かしく無いと云ふ説に成らなくちやならないのですから。

ラムスデン(立上り、暖爐を背にして此方に向きながら)馬

鹿な！ そんな事があるものか。お前はあんまり遠慮すぎるよ。まだ彼の子の年で男の眞價などが分るものか。（一層マジメになりて）それに何だ、彼の子は本當に素直だからの。父親の頼みだと云へば彼の子に取つてはそれが全く神聖な者になるのだ。お前は知つて居るか何うか、彼の子が年頃になつてからと云ふものは、何をすると云ふにも、せぬと云ふにも、『お父さんが斯うしろと仰るから』とか、『お母さんがイケナイと仰るから』とか、何時でも只それぱかり云つて、一度でも自分の意見を出した事はありはしない。全くそれは、あんまり素直なのが彼の子の疵だと思ふ位だ。それに私は折々云つて聞かせたよ、少しは自分で物を考へなくちやイケナイと。

オクタビアス（頭を振りて）　然しラムスデンさん、私はアンに向つて、お父さんがソウ望んで居らしつたから、それで私と結婚して下さいとは云ふ事は出來ません。

ラムスデン　ウム、そりやさうだ。無論さうだそりや善く分つて居る。そんな事は固より出來ない筈だ。然し何ぢや無いか、お前が自分一個の力でアンの心を動かしたら、アンに取つては丁度それが父の心に從ふ所以で、それほど滿足な事は無いだらう。のう、それなら可いだらう。それでもお前イヤと云ふか。

オクタビアス（悲壯の調にて）それは何れにしても私は他の婦人に對しては決して結婚は申込みません。

ラムスデン　ウム、そんな必要はありやしないそりやお前、アンが承知するよ。只（と云ひかけて急にマジメな顔になり）こゝに一つお前の弱味がある。

オクタビアス（氣遣はしげに）　何ですか、其の私の弱味と云ふのは？ 尤も、私には澤山弱味がありますけど。

ラムスデン　何ね、それは斯うなんだ、オクタビアス。（と机の上の赤表紙の本を取上げ）こゝに最も厭ふべき、最も憎むべき、最も有害な、最も醜惡な眞に唾棄すべき本が一冊ある。私は讀みはしない私はこんな汚らはしい者に眼を觸れはしない。只新聞の批評を見た。それに此の表題だけでも澤山だ。（表題を讀む。）『革命家の手帳。安逸なる上流階級の一員ジョン・タンナア著す。』

オクタビアス　（笑を含み）けれどあなたジャックは——

ラムスデン　（ムシヤクシヤして）イケナイ！　此家の中で、あんな者の事をジャックなど丶呼ぶ事は成らん。（荒々しく机の上に投げ棄て丶、それで少し氣が濟みたるらしく、机の此方に來てオクタビアスの側に寄り、深き感慨の口調にて）オクタビアス、私の亡友がお前の事を氣の好い者だと云つたのは全くだ。成程、此男はお前の學校友達だ。だからお前は其の竹馬の情で此男の肩を持たうとする。然し今ではモウ事情が變つて居る。それを考へんけりや成らん。お前は元あの家で内の子同樣に取扱はれて居た。お前があの家に住んで居るからには、眞逆にお前の友達を内に入れぬと云ふ譯にも行かなかつた。それで此タンナアと云ふ男は、お前の縁で、殆んど小供の時からあの家に出入して居た。そしてアンニィの事もお前と同じ樣に名を呼んだりして居る。それもだ、父親の生きて居る間は何も私が差出るにも及ばなかつた。それに其頃までは、此タンナアと云ふ男もまだホンの小供で、何を云はうと笑つて居れば可い譯で、云は丶小供が大人の帽子を冠つた樣な考だつたが、然し今ではタンナアもモウ大人になつたし、アンニィもモウ女になつて居るそして父親が死んだのだ。尤も私はまだ遺言狀の事も委しくは聞かないが、然しそれに就いてはあれが毎度私に話して居たよ。それであれが私をアンニーの後見人に遺言した事は分り切つて居るのだ。（こ丶で一段力を籠めて）そこでだ、私は今斷言する。今後もうアンニィは、お前に對する事は別としても、あのタンナアといふ奴などゝ心安立の交りをさせて置く事は決して出來ない。一體不都合だ。不正だ。可愛相だ。それに就いてはオクタビアス、お前は何うする氣かの。

オクタビアス　でもアンは自分でジャックにそう云つて居ました。ジャックの主義が何うであらうと、お父さんの懇意にした人だもの、私は何時でも歡迎しますと。

ラムスデン　（堪りかねて）そんな馬鹿な事があるものか。それで親に濟むと思ふか。（ラムスデンは狂牛の如くジョン・ブライトの肖像の方に突進したが、ブライトは一向それに同情せぬ顔付である。更にプン／＼してスペンサアの方に向つたが、是は又一層冷淡な顔をして居る。）いやオクタ

ビアス、お前に向つて怒る譯では無いが、凡寛大にも程度があるよ。私はお前の知る通り頑固黨では無い。世間の奴等は碌な事も仕ない癖に色々な肩書なんどクッ付けて居るが、私は昔から一平民レーバック・ラムスデンだ。世間の奴等は教會だの貴族だのにオベッカつて居るが、私は何時でも自由と平等の友だ。ホワイトフィルドにせよ、私にせよ、何時も新思想の爲に損ばかり仕て來たものだ。然し無政府主義だの、自由戀愛だのと云ふ、あの手の事だけは御免だ。私はアンニイの後見人に成るなら、アンニイも私に對する義務を知らなくちやイケナイ。私が承知しない。私が斷じて承知しない。ジョン・タンナアは今後決してあの家に入れない事にしなくちやイケナイ。お前もソウしなくちやイケナイ。

（小間使入り來る。）

オクタビアス　でも――

ラムスデン　（小間使の來た事をオクタビアスに氣付かせながら）シイイ！。何だ。

小間使　タンナア樣がお目に掛りたいと仰います。

ラムスデン　何にタンナア！。

オクタビアス　ジャックが！。

ラムスデン　タンナア氏が何用あつて此處に來るんだらう！。お目に掛る事は出來ないと云へ。

オクタビアス（氣を損じて）　あれも私の友人ですから、そんな風にして追出して下すつては餘んまりです。

小間使　それにモウあの方はお二階でお孃樣とお話中で御座います。ホワイトフィルドの奥樣、アン樣、ロビンソンのお孃樣、皆御一緒にお出で御座います。

ラムスデンは云ふに云はれぬ氣持になる。

オクタビアス（少し笑顔をして）ラムスデンさん。それがジャックの遣口です。兎にかくチョットお會ひ下さい。其儘直ぐに追ひ返すにしても。

ラムスデン（憤怒の氣を強いて抑へて、堅くるしき切口上にて）タンナアさんに、失禮ですが何うか此方にお出で下さいと云へ。（小間使出で去る。ラムスデンは暖爐の前に行き、敵を迎へるが如くに身構へる。）一體何と云ふ事だ、無作法千萬な。それが無政府主義なのだらう。そしてお前達もそれが好なのだらう。それにアン

ニイまでが一緒になつて！。アンニイまでが！

アン――――（と云ひかけて喉がつまる）

オクタビアス　いや全く、それを私も驚いて居るのです。あれは平生から非常にアンを恐れて居るのですが。是には何か譯があるのでせう。

ジヨン・タンナア氏、突然戸を開けて入り來る。只髭の生へた大きな男と云ふには餘りに若い。然し中年になればキツトそう云ふ風に成るべき體格であるが、今の所はまだ何處やら青年の細そりした所が殘つて居る。然し彼は決して若く見せ樣として居るのでは無い。其の着て居るフロツクコートなどは總理大臣にも似合そうに見える。其の肩幅の廣い大丈夫な所、其の頭の恰好の秀でた所、其の栗色の立髮、或は寧ろ大きな薄の一株とも云ふへき髮が其の高き額から後に流れて靡いて居る所などは、實に巍々堂々たる希臘神の趣きで、日の神のアポロよりも寧ろ荒神のジユピタアを思ひ出させる。彼れの辯は實に流暢自由で、其の鼻息の荒さと其の大きく開いた青い眼とは、如何にも性急な、激し易い性質を示して、少し狂氣かとも思はれる位。服裝には頗る氣を付けて居るが、それも見えを好む虚榮から來て居るのではなく、一擧一動にも自重の感を抱くから生じた結果で、チヨツト人を訪問するにも他人が結婚をする時か、或は地形石を据える式をする時か位の心持である。何分にも感じ易い、激し易い、誇張的な、熱情の人で一言にすれば自惚の大妄想狂で、是で若し諧謔（ユーモア）の氣が無かつたらば疾くに死んで了ふべき人物である。

所が、今こゝでは其の諧謔の氣が姑く引込んで居る。そして只一通り激して居るといふ位の段では無く、全身の氣分が只モウ諸もなく激し切つて居る。それでツカ〳〵とラムスデンの方に進み寄つた其勢ひは、今其の暖爐の眞前で彼を一發の下に射撃してのけるかと思はれた程である。けれど彼れが其の懐から取出した物はピストルでは無くて、大判の用紙に書いた書類を取つて、ラムスデンの傲然として居る其の鼻の先に突きつけて叫んだ。

タンナア　ラムスデン君、君は是を何だか知つてるか。

ラムスデン（傲然として）知らない。

タンナア　是はホワイトフイルドの遺言だ。アンが今朝持つて來た。

ラムスデン　アンと云ふのはホワイトフイルド孃の事ですね。

タンナア　そうです。我々のアンの事です。即ち君のアン、タビイのアン、そうして又今度は我輩のアンになるのだ！。

オクタビアス（色を青くして立上り）それは　君どういふ意味だ。

タンナア　どういふ意味！。（と、其の遺言を高く捧げて）君は此の遺言が誰をアンの後見人に指定したと思ふ。

ラムスデン（冷然として）それは私でせう。

タンナア　君だ！君と我輩だ！。我輩！我輩!!我輩!!!。君と我輩と二人だ！。（遺言状を机の上に投げつける。）

ラムスデン　君が！。そんな筈は無い。

タンナア　實に厭な事だが事實だから仕方が無い。（オクタビアスの椅子に身を投げて）ラムスデン君、どうかして僕を除いて下さい。君はまだアンをも僕をも知らない。アンは身分ある女の出來る罪惡は何でもする。そしてそれを一々、後見人がソウしろと云つたからと言譯する。彼は一切の事を我々に脊負はせるに極つてる。そして我々は、鼠が三疋寄つて猫の番をするほども彼を取締る事は出來はしない。

オクタビアス君、マアそんなにひどくアンの事を云ふのは止して呉れたまへ。

タンナア　此奴（こやつ）は彼に惚れてるんです。それが又一つの難問だ。彼は此男をオモチャにして置いて、そして跡で僕が贊成しなかつたと云ふか、それで無くば此男と結婚して置いて、そして跡で君がソウしろと命令したと云ふに極つてる。何しろ是は我輩の樣な年齡、我輩の樣な氣質の者に對して、實に迷惑至極な事です。

ラムスデン　兎にかく私に其の遺言を見せて下さい。（と、机の側に寄りてそれを取上げる。）私はあの舊友のホワイトフィルドが、私を人と組にすると云ふ樣な、私に對してそんな不信任な事をする筈が無いと思ふのだけれど——（遺言を讀みながら顏色變る。）

タンナア　それは皆んな僕の失策なんです。實に僕が馬鹿な事をしたんです。或時、彼が僕に、君をアンの後見人にすると云ふ話をしたのです。其時僕が、馬鹿だもんだから、若い娘を舊弊の老人の手に任せるのは愚だと云つて、大いに論じたものです。

ラムスデン　（呆れ返り）私が舊弊の老人!!!

タンナア　無論です。其時僕は丁度『白頭の政府を仆せ』といふ論文を書いた時知つたもんだから、其の議論なり引證なりを十分に使つて、老人の經驗と青年の元氣とを結合するのが一番の上策だと論じたものです。それで彼はキット僕の意見を取つて遺言を書き變へたに極つてる。日附を見ると、丁度其の話をした時から二週間ばかり後になつて居る。それでトウ〳〵こんな組合の後見人

が出來て了つた。

ラムスデン（色を靑くしてキッとなり）私は此の後見役を辭します。

タンナア　辭したつて何の効もありやしない。僕は今リチモンドから此處までの道で、辭しつゞけて來たんだ。けれどもアンは、私は孤兒だ、私は孤兒だと云ひ張るんです。そして平生、父の居る時にショッチュウ家に出入した者が、今になつて自分を荷厄介にする道理がないと云ふんです。そこが彼れの例の手です。孤兒が聞いて呆れる！丸で甲鐵艦が木の葉の如く風波に揉まれると云つて哀を人に乞ふ樣な話だ。

オクタビアス　そりや餘んまりだよ、君。アンは孤兒に相違ないんだらう。君は保護してやらなくちや成らんぢあ無いか。

タンナア　保護する?。僕が保護しなくたつて何の危險がある。彼は法律の保護を受けて居る。彼は人に好かれる性質を有して居る。彼は金を澤山持つて、そして良心なんど少しも持つて居らぬ只彼が僕を要する所以は、道德上の責任を皆んな僕に脊負はせて置いて、そして自分が其蔭で勝手な眞似をしようと云ふのだ。僕にや逆も彼れの取締なんど出來やしない。そして彼の方ぢや好な樣に僕を胡麻かして了ふんだ。ウッカリすると僕は彼れの夫にでも仕られて了ふよ。

ラムスデン　それなら君は此の後見役を辭するが可い。私は兎にかく君と一緒に此の役に就く事は御免を蒙る。

タンナア　宜しい。然しアンが何と云ふでせうイヤ旣にモウ云つてる。父の命令は神聖で背く事が出來ない。あなたが其の責任を負うても負はなくても、私は飽くまであなたを後見人と思ふと云つてる。辭する事なんぞ出來るもんですか。それを辭しやうと云ふのは、丁度靑大將が首へ卷きついたのをツイ摘んで投棄てると云ふ樣なものだ。

オクタビアス　そりや君、ジャック、僕に對しても餘んまりヒドイ言ひ草ぢやないか。

タンナア（立上りてオクタビアスの側に寄り彼を慰めて且つ嘆息しつゝ）年の若い後見人が必要だと云ふのならナゼ一體タビイをそれに仕なかつたんだらう。

ラムスデン　ほんとにさ！ナゼさう仕て吳れなかつたんだらう。（第一幕未完）

大久保より

榮

■あちこちのオヂさん達から手紙が來る。先づ第一に受取つたのが、若宮卯之助オヂさんからのお叱り狀。

「一口だけ申上げるが、ソシオクラシーはコントの語です。ウオードも一時は用ひたこともあるが、今はやめてゐる、考へて見るとベラボーな無意味な語で、政治と云へば、それで足りてゐるよ。」

■次ぎが山田嘉吉オヂさんからの、是れ亦お叱り狀。

「スティルナー論中の ウオルカーの序文を評した部分は、君が却つて誤解してゐるやうに思ふ。君は、あの、 In Stirner we have the philosophical foundation of the political liberty と云ふ文句の、個々の言葉にあまり力を置き過ぎて、爲めに全體の句の本當の意味を閑却して了つたやうに思ふ。」

■若宮のオヂさんの事は、隱れたる社會學者として多少世間でも知つてゐやうが、山田のオヂさんの事は丸つきり知らん人が多からう。長い間亞米利加にゐて、哲學法律文學などを研究すると共に、諸外國の名著數萬を藏して、一時はサンフランシスコに盛んな私塾を開いたりしてゐた事のある人だ。今は四谷で諸外國語の自宅教授をしてゐる。ウオルカーの序文の事は誠に申しわけもない。

■其の次ぎには一寸變つたお禮狀で、內田魯庵のオヂさんから。

「拜啓頗るおひいき分にやんはりしたる御批評忝く候。彼樣なかきすてのまんろくを御覽下さるだけにても光榮に存じ候。

就いては御挨拶と申すわけにも無之候へども、來春號に一頁の廣告の御厄介を賴度いつごろ原稿締切り候哉……

貴雜誌每號おもしろく拜見。唯今小生手許に來る雜誌中無二のものとして每號たのしみに致し居候。」

■隨分お世辭のいゝオヂさんだ。「大變面白く拜見してゐます」と云ふ言葉は、よくあちこちのオヂさん達から聞くが、此の內田のオヂさんのは、何んだか「君等のアブノールマルなメンタル・コンヂションを見るのがれ」と云ふ風に聞える。それならさうとシツカリお叱りを蒙むりたいものだ。オヂさんは矢張り叱る方が善い。

■小劍のオヂさんは每月何にか知らきつと云つてよこす。本月は正月號の原稿を賴んでやつた處、早速おことわり狀。

そして「二月のなら書けるかも知れないが、豫告だけで、それの實行されないのが君の雜誌の癖になつてもいけないから、出來たら送るといふ事にして、豫告は見合はせがよからう」との事。

■此のオヂさん妙なオヂさんで、人を訪れても門前まで行つて歸るくせがある。此の間も其の流でウチの門前まで來て歸りかける處を、保子に見つかつて、とう〳〵引きずり込まれた。盤し人がゐるかゐないか、大概門前で見當がいくんださうだ。これも此の頃はやりの文學者の銳感とか何んとか云ふんだらうかな。

■十二月號の校正を終へて、丁度來合はした吉川世民と寒村と僕と、三人連れで淺草の印刷所からアンダー・ゼ・タアーの見物に出掛けた。通の筈で先導になつた世民が實はあんまり通でもないやうで、普通の店屋ばかり並んでゐる通りをうろつかして、一向面白い處へ案內しない。

■そこでこんどは寒村が先導になつて、吉原へ繰り込んだ。寒村得意になつて、これが有名な見かへり柳、これが有名な何んと

か茶屋、これが有名な何んとか樓、なんぞと叮嚀に說明して聞かせる。三人ともみかんを頰ばつたり、南京豆をかぢつたりして步るくもんだから、兩側のネエさん達から「チョイト色氣のなくなつたお方」などゝ切りにやられる。

■すると先導の寒村が、何處かの矢張り三人連れの男と、「ヤア暫く」なんて大きな聲で挨拶してゐる。見れば橫濱の仲間の某々等だ。「實は靑鞜の女が買つた榮山を買ひに來たんだが、もう居ないんだとさ」とか云つて大いに失望の體だ。そのかはりに歸りによか樓をおごらした。

■處が其の翌日大問題が持ち上つた。夕方僕がウチへ歸ると、寒村の細君と保子と二人で僕を火鉢の前に座らして、生眞面目な顏をして、ゆうべは何處へ行つたと云ふご尋問だ。尋常に答へると、それでは竹島と云ふ女を知つてるか、と疊みかけて問はれる。知らん、いや知らん筈はない、と云ふやうな押問答で、要する處「今晩寒村と一緒にお遊びにゐらつしやい、こちらは竹島と云へばお分りになります」と云ふ電話が取次がつて來たとの事だ。

■さあ分らない。寒村も僕より一と足先きに歸つて尋問を受けたのだが、其の答辯更に要領を得ないと云ふ。裁判官のお二人も更に分らなければ、被告の僕等二人も一向分らない。裁判官は二人ともプン／＼頰べたを脹らしてゐる。被告二人は「本當にそんな事があれば嬉しいんだがなあ」とニコニコしてゐる。

■其の翌日、問題は無事に解決された。何んだ、つまらない。實業之世界の野依が、愈愈裁判確定して入獄にきまつたので、芝浦の竹芝館から別れの宴の招待をしてよこしたのだ、これで先づ山の神々のお怒りも解けたと云ふもの。めでたし／＼。

■しかし目出度くもないのは野依だ。とうとう本月の六日に入れられて了つた。あの強情な男が、綿入一枚で、せんべい蒲團の中へ柏餅になつて、ブル／＼慄えてゐるさまが目に見えるやうだ。寒くつて齒がカチ／＼鳴り合ふと云ふやうな事は、日本では監獄でゞもなければ見られない圖だ。

■先月は丁度編輯の時になつて、僕が半日檢束せられたが、こんどは又寒村がやられた。八日の朝、勤先へ行く途で文淵堂に寄る用があつて、平河町の處で電車を降りると、お供の刑事とあの邊の立番の巡査とが今此處を陛下がお通りになるんだからと云つて、寒村の胸倉をつかまへて、麴町署へ引ぱつて行つた。寒村餘程シャクにさはつた物と見えて其日一日爪をかぢつてゐた。

■此處まで書いたら、遊六のオヂさんから次ぎの手紙が來た。（十二月十日）

批評と注文

（十二月號を讀みて）　遊　六

■白雨君の歌チョト面白し。中の一首殊によし。

■榮君の座談よし。最後の一項殊によし。あんな風なのを毎號親切に書いて欲しい。

■寒村君のヘッダと廿世紀の評おもしろく讀んだ。殊に廿世紀の評が善く要點を攫んで居るのに感心した。只僕はあのヘッダの芝居の大切な原稿が、昔の芝居によくある何たらの色紙とか、お家の寶物とか云ふ物に善く似て、馬鹿々々しかつたと云ふ事が書き添へて貰ひたかつた。

■哀果君のオペラグラスには微笑を催した。

■和氣君の小話、分つた樣な、分らない樣な所がチョット乙だ。

■寒村君の罎底、大いに好し。ぜひ毎號あの氣込で書いてほしい。

十二月の小説

寒

■せつ子（小山内薫） 文藝倶樂部の十一月號に出た『結末』の前篇と見るべきもので小さと、君太郎などいふ藝妓に振られた小川といふ青年が、今度はせつ子といふ藝妓に戀して成功したものゝ、やがて金は無くなるし、待合からは謝はられるし、せつ子は煮えたのだか煮えないのだか解らないやうな態度なので、欺されたと想つて憤慨し乍らも又すぐ會ひたくなるといふ筋。書き方に熱が無さ過ぎるので事件の推移は可なり興味をもつて讀むが、主人公の煩悶に對しては、藝妓に振られた今時の若い男の心もちつてものはこんなものかとしか想へない。全くすまない譯だけれ共（中央公論）

■雲（久米秀治） 商店の若旦那であつて、清元の稽古に通つて、內氣で無口の新三郎にしては煩悶に堪へ兼れて國府津へ旅行に出るといふのが甚だ不似合に想はれるし、亦、最後の新三郎が宿に歸つて見ると、先刻東京へ歸つた筈のお愛が、自分の室に泣き伏して居たといふのに對する伏線である事が余りに明白で面白くない。新三郎が許嫁のお國に對する感情、お愛と戀に陷ゐつて行くデリケエトな心もち、もう些しつッ込んで描かなければ得心が出來ない。（三田文學）

■額の皮（水野葉舟） 例に依て、若い女の心理描寫といふ作者の獨參湯！男と江の嶋へ泊りに行く迄の、若い女の所謂錐の尖のやうにイライラする神經や氣分を描いたものだ。（新潮）

■人足の一人がせし盜み（田中落穗） 最後の暗い夜の港を漕ぎ廻つて、パン粉の袋を舟から盜み出すといふ處はチエルカッシュでも覗つたやうだけれ共、その盜みの原因が、情婦にせがまれた金の爲めだといふに至つては、その淺薄に少しくガッカリせざるを得ない。（黑耀）

■衝突（德田秋聲） 餅屋は餅屋といふが、全くこういふ所謂文壇の大家連の作物を見ると、何でもない事が實に巧く描いてある玉章とか何とかいふ大家の、チョイと描いた墨繪の山水と云つたやうなものでれ。（新小說）

■髮（杉本正生） 未完の長篇だ、京都の醫學校に入つて居る松井といふ男と、菊勇といふ藝妓とのラブアッフエアを、細かい筆致で描いてある。西暦紀元一千九百十二年代に生きて居る氣もちがしないほど、上手に描いてある。（青鞜）

■警察の子（長島豐太郎） 拘留の日限が終ると巡査部長に新太郎といふ名を附けて貰つて、彼は團子屋へ小僧奉公にやられた。彼はよく人から『警察の子』と云つて嘲けられたが、別に以前の生活を惡いとも想つて居なかつた。彼は或る日主人の使ひで質屋に行つて金を受け取ると、堪らなくなつて淺草へ行つた。今日中に活動寫眞を皆見盡さなければならないと想つて、時間が惜しくて堪らなかつた。然し金は遂に悉皆使ひ切れず、夜の空はもう放浪時代のやうな安心を與へないので、彼は殘りの金を握つたまゝ主人の家に歸つて了つた、そして翌晩は疲れ切つて寢て居た。（スバル）

■星空の下（西田廻瀾） 牛屋へ上つて女中に弄かつた、活動寫眞に入つて娘と躰を密着けたり足を踏んだりした、それから銘酒屋へ入つたがやつぱり面白くないので飛び出して了つた。七八年前の新聲なんていふ雜誌に、よくこんな小說が載つてゐた。（モザイク）

新刊紹介

■Syndicalism の研究

丸善に Arther D. Lewis の Syndicalism and the general strike　と云ふ本が來てゐる。何んな内容のものかと云ふお尋もあつたから、此處で一寸紹介して置く。

一體シンヂカリズムは、理論よりも實行を尚ぶのだから、そして其の理論は長い間の實行の結果として生じたのだから、此の主義を本當に理解するには、其の運動の歴史を一歩々々研究して行かなければ駄目なんだ。然るに大概の紹介者は、其の理論のみを說いて、運動の歴史は全く閑却してゐるものが多い。

此の本も矢張りさうだ。最初に佛蘭西に於けるシンヂカリズムの傳道用書を抜書して、次ぎに此の主義の理論の代表者とも云ふべきソレルの生涯と著作とを紹介し、最後に伊太利、獨乙、英吉利、及び西班牙に於ける其の運動の瞥見を下してゐる。

紹介は忠實に出來てゐる。寧ろ忠實すぎる位だ。いろ〳〵なシンヂカリズムの著書の文句を抜書した、此の方法も善からうかもう少し註釋がなければ、素人には一寸分りかねる處がある。

著者は社會主義學者として名ある人だ。

次手に丸善に來てゐた、或は來てゐる、他のシンヂカリズムの本の事に就いても一寸云つて置かう。

Arther Clay の Syndicalism and Labour は、此の主義の紹介としてよりは寧ろ攻撃として現はれたもので、著者が其の資本家主義的見解から筆を下して、其の材料も大概タイムスに仰いでゐる事は、豫め承知して掛られぱならぬ。しかし一九〇七年から一九一〇年に至る、歐羅巴のあちこちのストライキの事などは、中々面白く書いてある。

目下英文で出來てゐるシンヂカリズムの本は、此の二冊と、外に Louis Levine の The labour movement in France　とがある位のものと思ふ。

此の最後の本の著者は、コロンビア大學の教授で、全く學者としての研究的態度を以て書いたものらしい。

シンヂカリズムは佛蘭西で出來たものだ。そして其他の國では、今漸く起りかけてゐる位に過ぎない。従つて其の研究はどうしても佛蘭西に據らなければならぬ。

此の本は巴里コンムユン以前の佛國勞働運動に筆を起して、勞働總同盟の成立を詳述し、更に其の理論と理論家とを紹介し、最後にシンヂカリズムが獨立の運動として又理論として勃興した一九〇二年以來の其の運動を說いてゐる。

シンヂカリズムに對する政府の態度、ゲヂストや、ブルーシストや、アルマニストや、ブランキストや、又はアナーキストとシンヂカリストとの關係なども明白に記されてゐる。

どちらかと云へば、僕はシンヂカリズムの研究書として此の本を最も推奬する。佛文で書いた書物の中でも、一冊ものとしては或は之れに越すものがないかも知れぬ。

最後に一寸書加へて置くが、日本文で書かれたシンヂカリズムの紹介としては、先づ讀むに足るものは、福田博士の『經濟學研究』の一節と、米田庄太郎氏が『京都法學會雜誌』の六七月號に寄せた論文の二つに過ぎない。米田氏はベルグソンとシンヂカリズムの關係を紹介した、日本に於ける最初の人であらう。（榮）

■世間知らず（武者小路實篤著）

著者武者小路氏が「此の小說はある意味で自分の之から書くもの、第一章の氣がする」と自ら云つてゐるやうに、「世間知らず」は主人公がC子といふ未見の女から初めて手紙を受け取つた折に筆を起して、そうして遂に自分も、C子も、C子を嫌つて居た自分の母さへも結婚が自然の、そして必然の成行だと思ふやうになつた處で筆を止めて居る。

著者は「此の小說の書き方は自分に許されてゐる書き方の內最も自信のある書き方の一つである」と云つて居る。全く異つた書き方である。書き方ばかりでなく、此の小說の中に出て來る主人公の自分といふ男も、女主人公のC子といふ女も、餘つ程世間の人から見ると異つて居る。男が初めてC子に會つた時「目のふちが黑く、白粉をぬつた顏にはしみがあるやうに見へた。自分は變な不愉快を感じた」が、それから暫らく手紙の往復をして、二度目に一緒に藤澤に往つた時は、もう既に肉交して居る。それからショッ中手紙のやり取りをしたり小さな料理屋で會合したり、自分の家や友人の家などで會つたりして居る中に、女からは金の無心を云つて來るやうになつた。男は初めは欺されたのだと思つてイヤな氣がしたが、然し終ひには本を賣つたり、友人から借金したりしてゞも、拵へてやるやうになつた。

女は結婚が大嫌ひだつた、然し子役なんぞと關係した事もあつた。男はそんな事を聞いて寧ろ安心した、そして深入り出來るだけ深入りして見やうと云つた風な態度で自分と女との關係を觀て居た。その中に女は國へ歸つて、ショッ中手紙で想ひを云つてよこした。心をブチまけて、身を投げ出して、自分に賴つて居るのが分つて來た。男も女を可愛い、結婚しても構はないと思ふやうになつて來た。「つまり、二人は結婚する事になるのだらう」などゝ、男は自分の友達等の間に云つて居た。すると或る日、女から來た手紙の一つを母に見られた母は「選りに選つて、あんな女と關係されて口惜しい」「きつと後でヒドい目に會ふヨ」とか云つて怒つたが、すぐその口で「あんな女を自分の娘にするのかと思ふと情ない」と云つて、自分から先に結婚を是認するやうな口吻を泄らして居る。 そうしてもう終ひには、「私も何だか可愛くなつて來た」とか、女の寫眞を見ては「これならばいゝ」とかいふやうになつて來た。C子はまたこんな事を云つて來た「どう考へたつて、あなたを嫌ひになつたり、あなたから嫌はれたりしやう筈がないと思ひますからだつて些ともお嫁に行くのが厭じやなくなつたんですもの。」

此の小說は殆んど全篇C子から男に來た手紙で成立つてゐる。女の性格、女の感情女の男に對する愛情の推移は、直接には些しも書いてない。然し女の手紙を讀むとそれがよく解る。そうして此の小說には所謂小說らしいヤマが些しも無い、出來事といふものが些しも無い。二人を特に離し、或は特に近づける、波瀾だの運命だのといふものはまるで顏を出さない。二人がだんだん深みに陷つて行つて、如何しても結婚しなければならないといふやうになるには、些しも神秘的な若くは超自然的な作用を藉りないで、只だ二人の境遇、二人の意思、二人の感情、二人の性質だけですんで居る。それだけ、私は此の小說を讀んで世間の小說に求められない興味を感じた事を著者に謝する。（金八拾錢麴町區麴町二丁目二番地洛

陽堂）（寒）

■現代八面鋒（久津見蕨村著）

先きに「人生の妙味」を公けにして、ニーチエのツアラツストラを說き、不幸政府の忌諱に觸れて其の發賣を禁止せられた著者が、其の後久しく病床に橫はつて、八ツ當りに當つた氣焰錄である 世界の問題、時代と人物、現代小觀の三篇に分ち、猶其の各篇に十數の論文雜錄を收めてゐる。後の二篇の中にも多少著者の主張の現はれてゐない事もないが、恐らくは第一篇の中の夢の道士の研究や、シャボン玉の宇宙觀や又は私が神學小史などを以て、著者が最も苦心の作と觀ればなるまい。

夢の道士の研究は、ニーチエの新しき研究である。シャボン玉の宇宙觀は、「世界は種々雜多の物類の群生變化しつゝある處で夫れの吾人には側り知れぬ連續である」と云ふ多元的見解から「世界の實體は絕對ー神――である、萬物は其の部分で詰り絕對の表現したものである」といふ汎神論に痛棒を加へた著者の哲學觀である。そして我が神學小史は又、幼年時代の無意識の多神論から、兒童時代の無意識の多神敎となり少年時代の獨斷的無神論となり、更に靑年時代の半ば意識ある有神論となり、遂に轉々して今日の意識ある無神論となつた著者の思想史である。

此の三文章を始め、猶ルソー二百年紀念會の如き、超人と南京鼠の如き、又歷史の陰影の如き、何れも强烈なるニーチエイズムの現れならざるはない。小供がおもちやを玩ぶやうに、何んでも新しいものにばかり夢中になつて、それも一日か二日でうつちやつて了ふ今の日本の思想界に於て、著者が十年一日の如く、ニーチエの眞面目なる祖述に從つてゐるのは、珍らしい事と云はればならぬ。

只著者はニーチエと社會主義とを無暗に反對させやうとしてゐるが、何處の國の社會主義新聞でも皆なニーチエの著者を其の讀者に推奬して、そして超人は社會主義の理想であると云つてゐる事實を何う說明するのだらう。ニーチエは素より社會主義者ぢやない。けれども社會主義者は、左程にニーチエに反對するものぢやない。（價金八十錢小石川區原町丙午出版社）（榮）

■寄　贈■

白樺　實業之世界
新公論　婦人評論
內外敎育評論　黑耀
帝國文學　奇蹟
モザイク　新潮
新佛敎　日月
人物　東京魁新聞
靑年文壇　郊外新報
スバル　東北
テラコツタ（創刊號）　ニコ〳〵
文藝講壇（創刊號）　村落通信
靑鞜　微光
現代八面鋒（久津蕨村著）　丙午出版社
世間知らず（武者小路著）　洛陽堂

■十二月號目次■

社告

■こんど讀者諸君の御便宜の爲めに、殊に新刊紹介欄を擴張して、新刊書籍の懇切なる紹介批評を試みると共に、本社に於て新本古本の取次販賣を致します。

■洋書と古本とは、豫め書物の有無及び價段の御照會を願はなければなりませんが、新本は定價通りに戴いて、郵税だけ當方で負擔致します。

■御注文は成る可く振替貯金を利用せられたく本社の振替口座番號は、

東京　一七一六三番

に加入してあります。郵券代用は一切御斷り致します。

■出來るだけ廣く讀者諸君の御注文に應ずる積りではゐますが、さし當つて次ぎの十六種の書籍だけは、殊に當方から御推奬致します。

▲現代戰爭論（安部磯雄著　價金八十五錢）

▲農工業の調和（クロポトキン著　佐藤寛次譯　價金一圓三十錢）

▲豈辯を好まんや（若宮卯之助著　價金六十錢）

▲基督抹殺論（幸德秋水著　價金七十錢）

▲賣文集（堺利彦著　價金壹圓）

▲青年の敵（野依秀一著　價金壹圓貳拾錢）

▲所謂新シイ女（坪内逍遙著　價金一圓）

▲赤裸の人（ルソー著　堺利彦譯　價金九十錢）

▲懺悔錄（ルソー著　石川戯庵譯　價金參圓）

▲近代文學十講（厨川白村著　價金壹圓貳拾錢）

▲黎明期の文學（相馬御風著　價金八拾五錢）

▲土（農民小說）（長塚節作　價金一圓十錢）

▲復活（トルストイ作　内田魯庵譯　價金參圓參拾錢）

▲樂天四人（堺利彦著　價金六拾錢）

▲二十世紀（ショウ原作　松居松葉譯　價金五十五錢）

▲マグダ（ズーダーマン作　文藝協會譯　價金九拾錢）

■定價一冊金拾錢、半年分前金五拾五錢。一年分前金壹圓。但し海外よりの御注文は別に一冊金二錢宛の郵税を要す。

■毎年數回擴大號を發行す、其場合には其定價に應じて前金より差引す。

■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。

■廣告料特別一頁拾五圓普通拾圓。

■本社振替貯金番號一七一六三

大正元年十二月廿六日印刷納本
大正二年一月一日發行

編輯兼發行人　府下大久保百人町三五二　近代思想社内　大杉　榮

印刷人　府下大久保百人町三五二　荒畑勝三

印刷所　淺草區黑船町二十八番地　東京並木活版所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

月刊雜誌

人物

第七號

十二月十五日發行

一部金五錢
十二部前金五十五錢
廿四部前金一圓(郵税共)

本誌に對する新聞評

政治家の月旦もあれば實業家の評判もある宗教家の惡口も出れば學者の皮肉も載せてある小雜誌であるが材料豊富で活氣横溢體裁亦佳、其れで僅々一部五錢十二部五十五錢とは安いものである(中央新聞評) 古今の人物を縦横無盡に評論し爬羅剔抉頗る痛快なる雜誌なり(北陸新聞評) 全紙を通じて一種の特徴ある雜誌なり(扶桑新聞評) どうやら執筆者は文壇の變り物らし(米澤新聞評) 執筆者諸氏何れも文壇の切れ者讀んで面白き事この上なし(越佐新聞評)

第七號目次

狂犬論(一記者) イエスとマホメツト(宮崎湖處子) メービー博士(新渡戸稲造) マホメツト教の精神(エム・バラカツラ) ホイツトマンの少時(下)(石川三四郎) 松崎天民論(一布衣) 談雄社の小集、建部遯吾論(風雲樓客) 人物評論の新様式(鵜崎鷺城) 駄文と駄句と(小羊迷) 信長論(尾池宜卿) 橘家圓喬論(淺黄幕) 實業家の著述家(西川光次郎) 山室軍平氏(安達太郎) 玉石同架(一記者) 國家道徳論を評す(一記者) リズム説の創始者(矮亭生) 山崎今朝彌(大杉榮)

發行所 東京市本郷區湯島三組町二十番地 人物社 振替二三一九〇番 電話下谷四七二四番

陸軍教授西村豐序日本藥學協會主幹鴨田修治著●洋綴美本正價金四拾錢送料不要

再版

どもり矯正法

本書は墺國醫學博士コオン氏のドモリ矯正法に則り著者が研究の結果世に公にせしもの也此書に就て矯正せば如何に『ヒドキ』ドモリの人も數十日の練習にて矯正し得て正音の人となり得る良書也

（八版）陸軍野砲兵曹長興藤久登著

最新長身肥滿法

實費郵劵二十五錢にて送附すべし

せの低き人は本書に依る時高くなる やせたる人も病後、產後、其他生れ付の人にて忽ち肉付強健となる良書なり

日本藥學協會主幹 鴨田游水著

美本三百頁正價金六十錢（郵稅六錢）

四版 男女通俗秘密療法

本書は前きに男女衞生秘密療法と題し出版せし處風俗壞亂と認められ發賣を禁止せられたるを二三訂正更に出版せしに即時賣り切れ又今や旬日ならずして再版す

賣り切れぬ内早く求められよ左に本書の内容の目次大略を記す頭髮を美しくする療法、白毛豫防及白毛染藥製法、ちゞれ毛の療法、毛生藥調劑法、皮膚を美しくする療法、皺を防ぐ療法、いぼ、にきび、そばかすの療法、色を白くする療法、ひつ、なまづ、わきがの療法、ほくろの療法、陰毛發生法及陰虱の驅除法、膣の臭きを治する法、月經時の養生法、子宮病の療法、手淫の害毒と其療法、過淫の害毒と其療法、衞生秘密問答、膣加答兒と陰門瘙痒症の療法、妊娠及避妊法の話、不感症の療法、陰萎の強直症及包莖の療法、不感症及淫慾缺乏症の療法、淫慾を制止する法、遺精、早漏『腎虚』の療法、黴毒淋病の療法、疳瘡と横根の療法、あか鼻の療法、鼻を隆くする法、肥える法及瘦せる法、長身法、頻小便療法、癲癇の療法、肺病の療法、癩病の療法外皆最新療法數十件本書は衞生的新知識を養成せんとする者及家庭に在て秘密病の爲に苦辛しつゝある人其他進步的賣藥化粧品を製造販賣する人々の良師友

職業學講義

●本講義は文明的確實しかも小資本にて經營し得らる化學的工業數十種を撰び每月二回二百六十頁以上の教授書を發す講義は平易簡明しかも叮嚀七ケ月卒業月費四十錢全部出來十四冊一時送り特價貳圓五拾錢詳細貳錢送れば規則を送る

藥學講義

●本講義は自宅に在て文部省施行の藥劑師試驗に應ずる者の羅針盤藥業家の侶伴十七ケ月講了月費卅五錢全部出來一時送り特價五圓規則郵劵貳錢見本一號廿錢を要す

發賣所 東京本郷丸山福山町四番地 日本藥學協會

……▲天下無類の珍本。他に求めて斷じて得ず▼……

女優と藝者

開卷皆な艶麗にして滿誌愛嬌に溢る……

『笑』臨時增刊
一月十五日發行
定價一部二十五錢
郵税四錢

小說
見物
……田村西男作

本號にて刮目注意すべきは萬龍小夜子安子の諸孃と女優音羽かね子小林延子東日出子の諸孃が優婉なる作物にあり
其趣向の警拔なる大正劈頭の好讀物たり

……▲此本は必ず江湖諸君を驚動せん▼……

神田區駿河臺北甲賀町
笑社



大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正元年十二月廿六日印刷納本 大正二年一月一日發行